

財 團 法 人

大原農業研究所史

昭和 36 年 3 月

財團
法人 大原獎農会



創設者，初代理事

大 原 係 三 郎

略 歴

明治 39 年 9 月	倉敷紡績株式会社取締役社長
大正 3 年 7 月	財団法人大原奨農会創設
大正 8 年 2 月	大原社会問題研究所創設
大正 10 年 7 月	倉敷労働科学研究所創設
大正 15 年 6 月	倉敷絹織株式会社創設 取締役社長
昭和 5 年 12 月	株式会社中國銀行創設 取締役頭取



第 2 代 理 事

大 原 総 一 郎

略 歴

- | | |
|---------------|-----------------|
| 昭 和 13 年 12 月 | 倉敷レイヨン株式会社常務取締役 |
| 昭 和 14 年 1 月 | 倉敷紡績株式会社取締役 |
| 昭 和 14 年 5 月 | 倉敷レイヨン株式会社社長 |
| 昭 和 16 年 1 月 | 倉敷紡績株式会社社長 |
| 昭 和 18 年 2 月 | 財団法人大原農業研究所理事 |
| 昭 和 30 年 6 月 | 経済審議会委員 |



初代所長, 理事
近藤万太郎



第2代所長, 理事
西門義一



創設時代の農業研究所全景

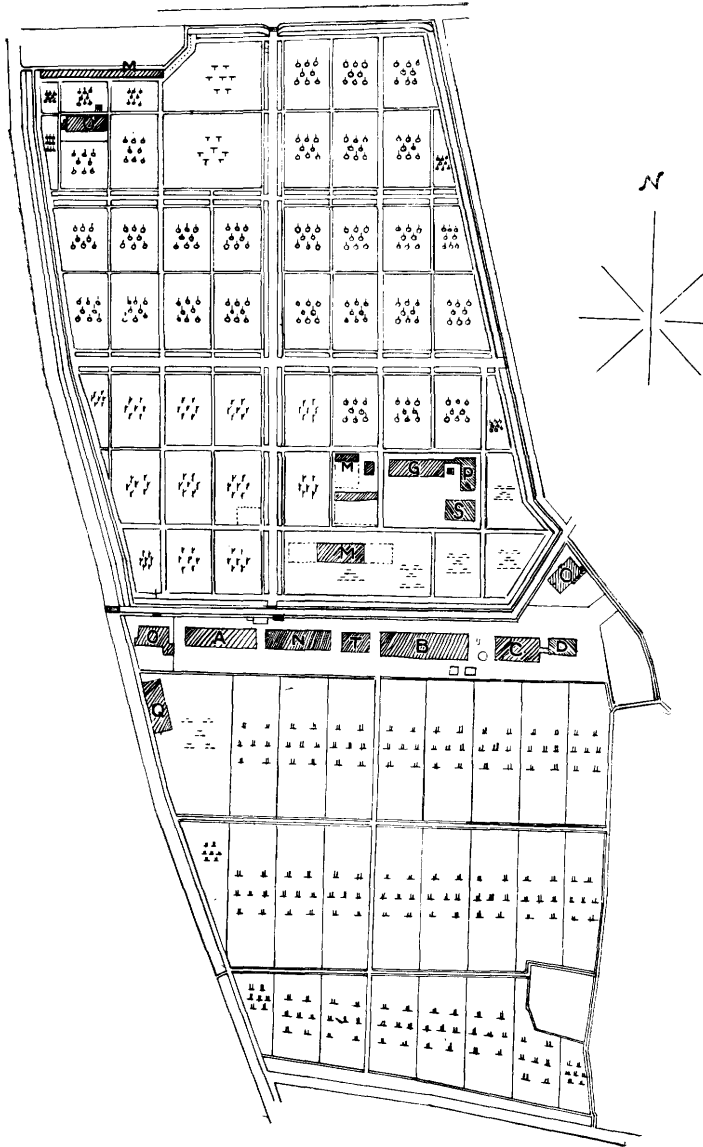
前景は花卉園，中景は果樹，
後の建物は研究室



創設時代の研究所職員

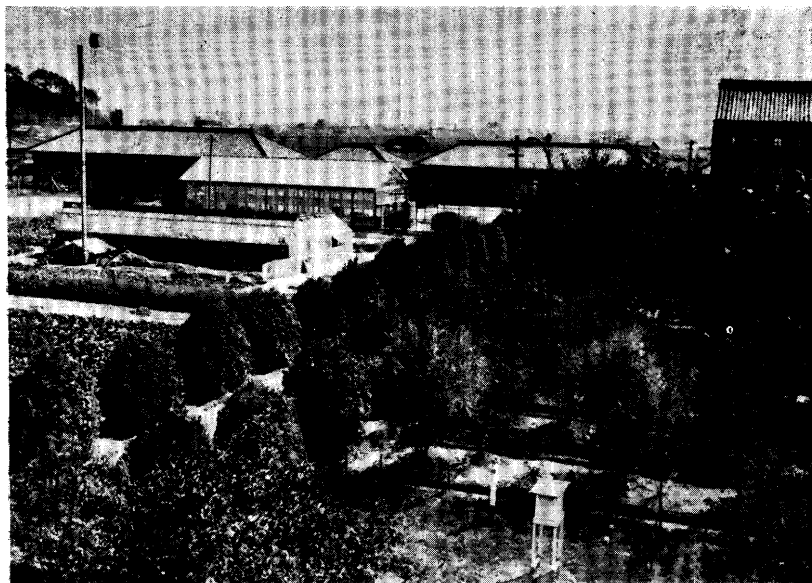
前列左より 川又綾之助，近藤万太郎，
大原孫三郎，原澄治，大杉繁，三宅千秋

創設時代の農業研究所配置図

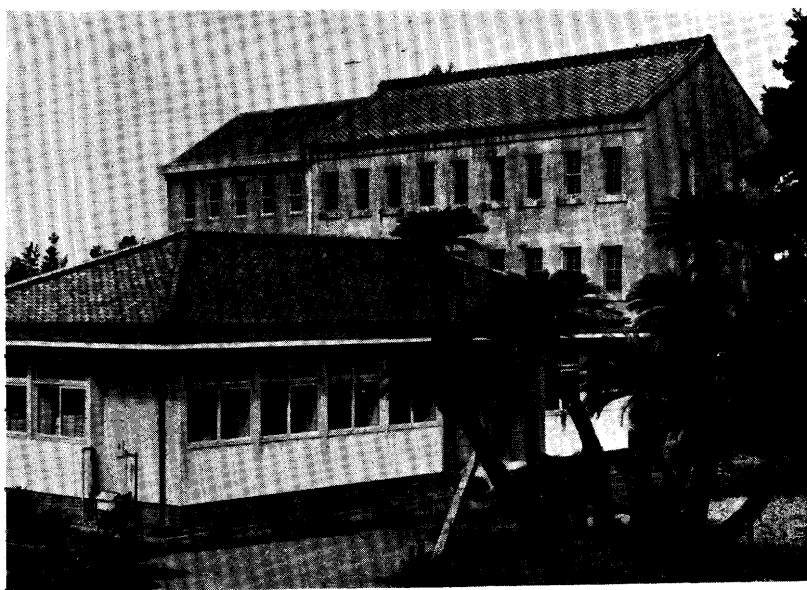


- TT 花卉園
- TT 植物園
- ☼ 畑
- ☼ 水田
- ☼ 果樹園

- | | | |
|---------|------------|------|
| A 種芸研究室 | G 園芸研究室 | P 畜舎 |
| B 化学研究室 | M 温室, ガラス室 | Q 納舎 |
| C 病理研究室 | N 事務室 | S 置室 |
| D 昆虫研究室 | O 宿舎 | T 機械 |

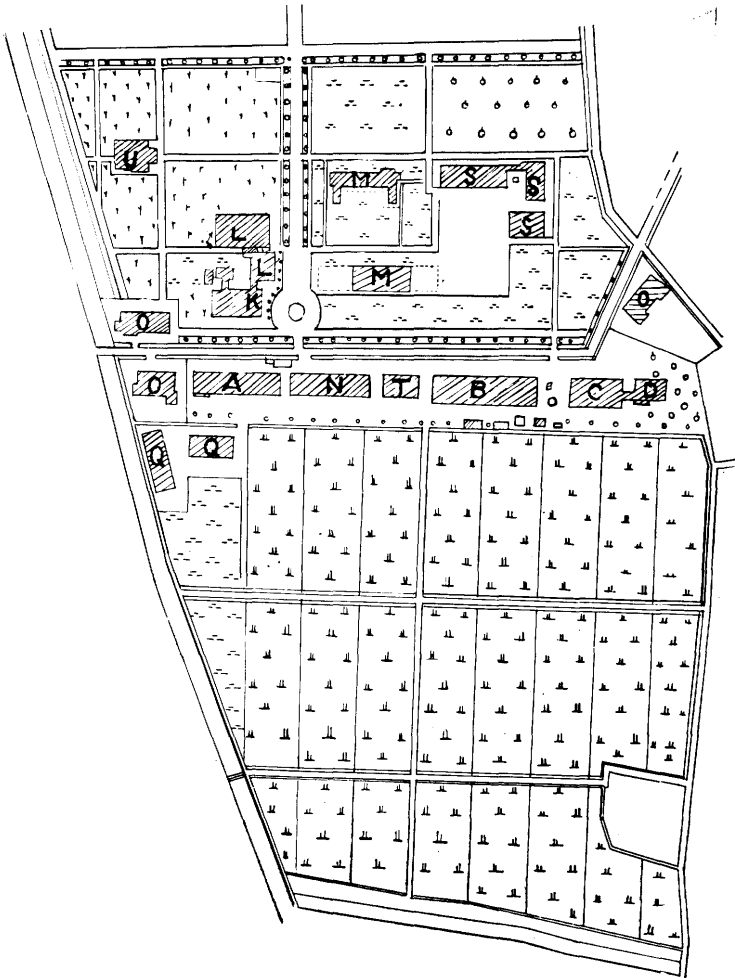


中期の大原農業研究所



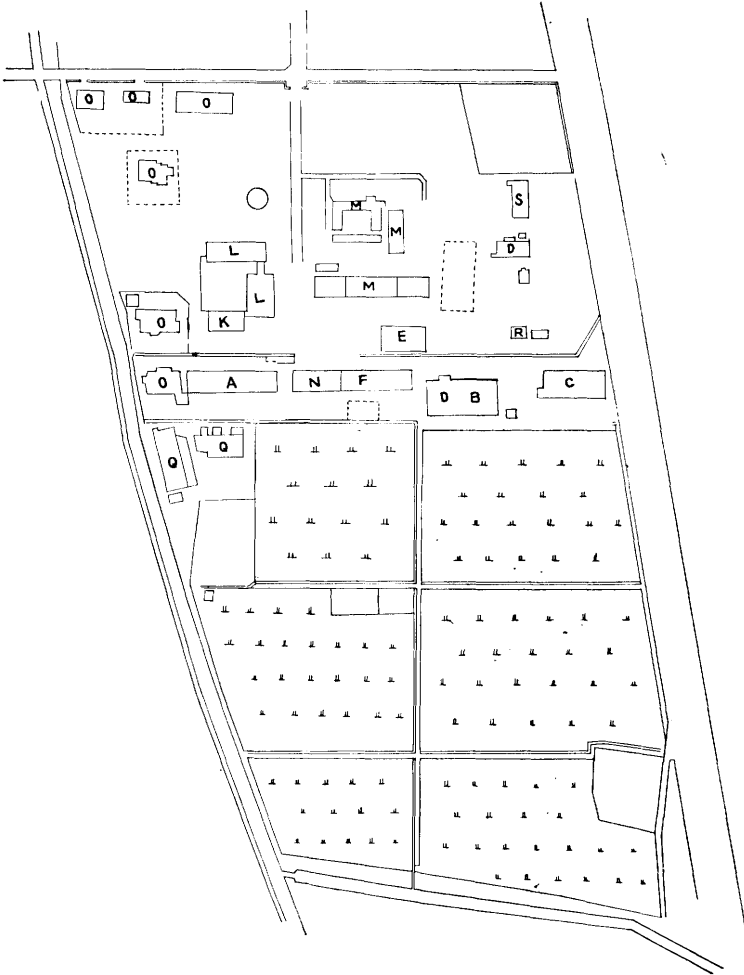
現在の図書館 後方右は旧書庫，左は新書庫，前方は閲覧室

中期の大原農業研究所配置図



- | | | | |
|---------|------------|-------|-------|
| A 種芸部 | L 図書館 | S 物置 | ♣ 植物園 |
| B 化学部 | M 温室, ガラス室 | T 機械室 | ☼ 畑 |
| C 病理部 | N 事務室 | U クラブ | ☪ 水田 |
| D 昆虫部 | O 宿舎 | | 🌳 果樹園 |
| K 農業経営部 | Q 収納舎 | | |

現在の岡山大学農業生物研究所配置図



- | | | | |
|---------|---------|------------|-------|
| A 作物遺伝部 | E 作物生理部 | M 温室, ガラス室 | R 配電室 |
| B 生物化学部 | F 微細気象部 | N 事務室 | S 物置 |
| C 植物病理部 | K 整理室 | O 宿舎 | 水田 |
| D 害虫部 | L 図書館 | Q 収納舎 | |

目 次

財団法人大原農業研究所理事長 大原総一郎 序文

財団法人大原農業研究所史発刊のことば

I. 財団法人大原奨農会の創立—その動機と目的	1
II. 寄 付 行 為	5
III. 経 営 状 況	12
IV. 研 究 活 動	17
V. 農業講習所，農学講演会および講習会	42
VI. 農 業 図 書 館	45
VII. 財団法人大原農業研究所の解散と新財団の設立	49
附 研究発表一覧	52

序

このたび、財団法人大原農業研究所史がまとめられ、印刷に付せられることとなった。

同研究所は昭和26年以降岡山大学農業生物研究所となっているが、その濫觴は大正3年に遡る。それ以来、歴代の所長および所員各位の熱心な研究の成果は、単に我が国の学界に大きな寄与を果しただけでなく、この一地方都市にある研究所を世界的な存在にまで高めるほどのものとなった。

研究所の37年間の歩みについては本文の語るところに任すべきであるが、父がこの研究所創設に思い至った動機は、もっと広範な農民教育を中心とする学校を作ろうということであったと聞いている。しかしその準備のため外遊された近藤博士の学者的な意見に従って、純学術的な研究所として生まれた。そしてこの研究所も、大原社会問題研究所や倉敷労働科学研究所と同じように、勝れた所長の指導の下に、一切自由な研究に委ねられた。

父はこの研究所の在り方が、最初の意図とは多少はずれたものであったにもかかわらず、この研究所には特別の意義と愛着を感じていたようである。その第一の理由は、これは地主の家が当然なすべき社会奉仕であると考えていたことであり、第二の理由は、実現はしなかったとはいえ、この研究所の性格や使命については、最初から自分でいろいろ想を練っていたということにもとづくものと思う。

しかし何といても一個人を背景とした研究所では、研究上の独立と自

由を保つことはできても意に任せぬことも多く、特に戦後は所有農地の解放のため経常的な収入財源を失い、終に今日の新しい姿となってその歴史的な歩みを続けることとなった。

この機会に故近藤所長はじめこの研究所に関係された総ての研究者の方達と、この研究所の発展存続のために直接間接多大の力を添えていただいた内外の方々に、深い感謝の気持をお伝えしたいと考える次第である。

昭和 35 年 3 月

大 原 総 一 郎

財団法人大原農業研究所史

発刊のことば

財団法人大原農業研究所は、大正3年7月財団法人大原奨農会農業研究所として創設され、昭和4年3月本名称に改められたもので、引続き農事改良に関する基礎研究を行なってきた。

昭和24年5月31日岡山大学が設置されてから、本研究所はその有力な構成部門と成って斯界につくすべく望まれていたが、ついにその研究用資産を岡山大学に無償寄付することとなり、昭和26年3月31日日本研究所の一部が、ついで、27年4月1日残部が岡山大学に移管され、農学部附属大原農業研究所として発足した。その後昭和28年度には大学附置研究機関に昇格し、岡山大学農業生物研究所となって「農業生物に関する学理およびその応用の研究」を6部門の下に行ないつつある。

これに伴って、財団法人大原農業研究所は昭和28年解散したが、その遺留財産から得られる利金を岡山大学農業生物研究所における研究の後援資金とすべく、新たに財団法人大原奨農会が昭和32年創設せられた。

さて、財団法人大原農業研究所は、上記のように、岡山大学農業生物研究所ならびに財団法人大原奨農会をその後身および分身として残して消えたが、その日本農業界に残した功績は非常に大きいので、その創設者である故大原孫三郎氏を永く記念し、又財団の業績を回顧するよすがとして、ここに本財団史を編纂することとした。

できるだけ詳細にと考え、あらゆる資料を集めて取りかかったが、何分

にも創設が大正3年であるので、資料には散逸したものもあり、完全とい
い難いことは止むを得ない。過誤があれば、それは編纂者の責任である。

本史の発刊は、現財団法人大原奨農会理事長大原総一郎の勸奨にかかる
もので、資料の蒐集調査には、現農業生物研究所平岡章一事務官その他多数
の職員に負うところが極めて大きい。ここに記して感謝の意を表する。

昭和35年12月

西	門	義	一
高	橋	隆	平
杉	山	章	平

I. 財団法人大原奨農会の創立—

その動機と目的

当研究所の創設者である大原孫三郎氏がその生涯を通じ、社会福祉の増進に意を用い、本業以外に、この方面でも極めて偉大な足跡を残されたことは世人周知のところである。とくに農業科学化の必要性を痛感され、農業研究を促進して技術の改善をはかり、その結果を普及して農民の経済的地位を向上することに深い関心を寄せられていた。これは大原氏が祖先から多くの小作地を相続されたことと直接的なつながりがあったといえる。すなわち、明治40年(1907)以来、小作米品評会を開催し、地主と小作者間の相互親和をはかるとともに、農事の奨励と米質改善に努力された。その後、明治43年(1910)には、大原家と小作者との間に一種の小作会である大原家奨農会をつくられた。この会の事業は、上記の小作米品評会の開催だけに止まらず、農業技術者による小作地の巡回指導、試作地、指導田の設置、あるいは農事講習会の開催などであって、戦後ようやく政府の手で始められた普及事業を個人の手で、今から数十年も前に行なわれたのである。このほかなおこの会の事業は肥料、農具、土地の購入資金の貸付や貧しい小作者に対する厚生資金の貸与あるいは贈与など、福利厚生の方にまで及んだ。

しかし、大原氏はこうした自分の小作者の保護施策だけではあき足らず、さらに進んで広く一般農事の改良に貢献することを意図され、大正3年(1914)には財団法人大原奨農会を創設されるに至った。そして上述の小作会はこれを解散し、小作施設事業は大原家の農業部で従前どおり継続

することとし、後には奨農土地株式会社でその仕事を行なった。

この大原奨農会創設の目的は、寄附行為の第1条にうたわれているとおり、農業の研究とその応用による農事の改良にあった。これは社会に奉仕する気持の具体化であることはいうまでもないが、大原氏が祖先の勤勉努力を永遠に記念しようという報恩事業の性格をも併わせ持っていた。

大正3年3月1日第8回小作米品評会褒賞授与式々場で大原氏が述べられた大原奨農会設立に関する次の陳述はこれを明示している。

財団法人大原奨農会設立に関する大原氏の陳述概要

(前 略)

私の父が亡くなりまして本年は5年になります。祖父が亡くなりまして33回忌になります。私から申せば父祖の勤勉に因りて現在の私が在る訳であります。此の祖父の33年、父の5年の回忌に際して、父祖の努力されたる記念として、又、私個人としては父祖に対する報恩の記念として、現在大原家所有の土地中より100町歩を寄付致し財団法人を作りたいと思うのであります。財団法人は大原奨農会と称し其の目的は「深遠なる学理を研究し之れが實際の応用に依る農事の改善」であります。此の会の事業が将に來る可き農業問題に対し貢献することが出来れば非常なる幸福であると思ひます。此の会の仕事が農業制度上に就きて農業当事者の自覚の上に就きて注意を惹起する事が出来れば更に幸福であると思ひます。仕事としては農業研究所及び農学校を作り種子の改良、農具の改良、肥料、土壤及び病虫害の研究其の他一般學術の普及に努めたいと思うのであります。而して、此の寄附致した土地は試験田となり指導田となり夫より得た

る収入を以て此の会の独立を計りたいと思います。是以上の仕事は経済の許す範囲に於いて、又、此の会に働いて居る人達の努力に依りて出来る丈の発展を見たいと考えて居るのでございます。云々。

この声明に先だち、研究室の建築、農場の整備などについて準備が進められ、大正3年7月2日（1914）には文部省の認可を得、設立者よりの寄附の土地、建物の所有権移転登記申請書を岡山区裁判所および玉島区裁判所へ提出した。続いて、7月4日には評議員の選任を行なった。そして7月6日には財団法人設立登記申請書を玉島区裁判所へ提出し、これを以て財団法人大原奨農会設立の準備を完了した。

当日すでに、種芸、園芸、農具気象3分野の研究施設の整備が終わっていたので、当日から研究事業を開始した。その後引き続き化学および病虫研究室の施設完成を急ぎ、大正4年（1915）には5分野に亘る研究態勢が完成された。

財団法人大原奨農会は、農業研究所の経営を主体としたものではあるが、このほか農学校の設立や品種改良、農具の改良、研究成果の普及と岡山地方農業の振興をも意図した機関であった。大正9年4月（1920）に設立された農業講習所は4カ年に亘って地方農家の子弟を教育して、地方農業の指導者を養成する目的でつくられたものであって、これは奨農会の事業の性格の一端を示すものである。

しかし、こうした多面的な事業を経営するよりも、農学研究だけに努力を集中することが適切であることを考え、昭和4年（1929）大原奨農会創立15周年を卜し、機関の名称を財団法人大原農業研究所と改称するとともに

に、寄附行為を改変し、理事の1名を研究員の互選により選出して、財団設立者である理事とともに研究所の経営、研究の直接指導に当たることとなった。

鉄骨金網室 2棟 此建坪 48坪

硝子室 2棟 此建坪 80坪5合

第5条 本会の経費は資産並に其事業より生ずる諸収入を以て支弁す
毎年度経費の剰余金は之を別途積立金として本会臨時の費用に
充つ

本会事業翼賛の為補助金奨励金又は寄附の申込ありたるときは
之を受くることを得

第6条 本会の資産は理事之を管理す
但し資産管理の方法は評議員会の決議を経て別に之を定む

第5章 役員

第7条 本会に左の役員を置く

理事 1名

監事 2名

評議員 5名以上

第8条 理事は設立者之に当る 死亡其他の事故により欠員となりたる
ときは評議員会に於て之を選任す

第9条 理事疾病其他の事故に依り会務を執る能はざる場合は評議員中
より代理々事を互選するものとす

第10条 評議員は設立者之を選定す 死亡其他の事故により欠員を生じ
たるときは評議員会に於て之を選任し理事の承認を経るものと
す

第11条 監事は評議員会に於て評議員中より之を選任す

第12条 監事の任期は5ケ年とす

- 第13条 理事は本会を代表し諸般の事務を処理す
評議員は重要事項に関し随時理事の協議に与るものとす
- 第14条 評議員会は理事に於て其必要を認めたる時又は評議員の過半数の請求あるとき理事之を招集す 第8条及第9条の場合に於て理事招集し得ざるときは監事之を招集す
- 第15条 評議員会は過半数出席し其過半数の同意あるに非ざれば決議することを得ず

第6章 事業

- 第16条 本会は第1条の目的を達するため左の事業を行う
1. 農業研究所の設置
 2. 農学校の設立
 3. 改良種苗農具及肥料の普及頒布
 4. 一般学術の講演及印刷物の頒布

第7章 会計

- 第17条 会計年度は4月1日に始まり翌年3月31日に終る
理事は年度開始前に予算を定め又其年度後1ヶ月内に前年度の決算を了し監事に報告し其承認を受くべきものとす

第8章 解散

- 第18条 本会は理事及評議員全員の同意あるに非ざれば解散することを
得ず
- 第19条 本会解散の場合に於ける残余財産は設立者累代の相続人に帰属するものとす

第 9 章 附 則

第 20 条 本寄附行為は評議員会の決議及理事の同意に依り主務官庁の認可を得て之を変更することを得
但し其目的を変更することを得ず

昭和 4 年大原奨農会創立 15 周年を記念し、研究事業の拡大強化を意図され、次の寄附行為の如く、大原奨農会の名称を大原農業研究所に変え、事業目的を研究事業に一本化し、かつ、経費充足の目的で新たに田畑 100 町歩を追加寄附された。条文は次の如くである。

財団法人大原農業研究所寄附行為

第 1 章 目 的

第 1 条 本所は農事に関する学術の研究及び農事の改善を目的とす

第 2 章 名 称

第 2 条 本所は財団法人大原農業研究所と称す

第 3 章 事 務 所

第 3 条 本所は事務所を倉敷市に置く

第 4 章 資 産

第 4 条 本所の資産は設立者大原孫三郎より寄附したる左の土地及び建物を以て之を組織す

1. 土 地

田	199町 5 反 5 畝 1 歩
畑	3 町 2 反 8 畝 10 歩
宅 地	5,081 坪 9 勺

原 野	6 畝12歩
用 水 路	1 畝15歩 5 合
池 沼	3 反 6 畝歩
山 林	18歩

1. 建 物

煉瓦造 3階建瓦葺	1 棟	此建坪	31坪 1 合 5 勺
木造瓦葺平屋	20棟	此建坪	509坪 1 合 6 勺
木造草葺平屋	11棟	此建坪	211坪 5 合 5 勺
硝 子 室	2 棟	此建坪	80坪 5 合
金 網 室	2 棟	此建坪	48坪

第 5 条 本所の経費は資産並に其事業より生ずる諸収入を以て支弁す
 毎年度経費の剰余金は之を別途積立金とし本所臨時の費用に充
 つ 本所の事業翼賛の為補助金，奨励金又は寄附の申込ありた
 るときは之を受くることを得

第 6 条 本所の資産は理事之を管理す 但し資産管理の方法は評議員会
 の決議を経て別に之を定む

第 5 章 役 員

第 7 条 本所に左の役員を置く

理 事	2 名
監 事	2 名
評 議 員	5 名以上

第 8 条 理事の内 1 名は設立者之に当り 1 名は研究員の互選により之を

定む

設立者たる理事死亡其他の事故に依り理事たる地位を去りたる
ときは設立者の家督相続人之に当る

研究員の互選に依る理事の任期は4ケ年とす 但し再選を妨げ
ず 研究員は理事之を任免するものとす

第 9 条 理事疾病其他の事故に依り所務を執る能はざる場合は評議員中
より代理々事を互選するものとす

第 10 条 評議員は設立者之を選定す 死亡其他の事故に依り欠員を生じ
たるときは評議員会に於て之を選任し理事の承認を経るものと
す

第 11 条 監事の任期は5ケ年とし評議員会に於て評議員中より之を選任
す

第 12 条 理事は本所を代表し諸般の事務を処理す

第 13 条 評議員は重要事項に関し理事の協議に与るものとす

第 14 条 評議員会は理事に於て其必要を認めたる時又は過半数の評議
員より請求ありたる時理事之を招集す 死亡其他の事故によ
り理事欠員となり之を招集し得ざるときは監事之を招集す

第 15 条 評議員会は過半数の評議員出席し其過半数の同意あるに非ざれ
ば決議することを得ず

第 6 章 事 業

第 16 条 第 1 条の目的を達する為め左の事業を行う

1. 研究員の設置

2. 一般学術の講演及印刷物の頒布
3. 研究員の合議により必要と認め評議員会の同意を得たる事項

第 7 章 会 計

第 17 条 会計年度は毎年 4 月 1 日に始まり翌年 3 月 31 日に終る 理事は年度開始前に予算を定め其年度終了後 1 ヶ月内に前年度の決算を了し監事に報告し其承認を受くべきものとす

第 8 章 解 散

第 18 条 本財団は理事全員及評議員会の議決あるに非ざれば之を解散することを得ず

第 19 条 本財団解散の場合に於ける残余財産の処分方法は理事全員の同意及評議員会の議決に依り主務官庁の認可を得て之を同一目的其他の公益事業に寄附するものとす

第 9 章 附 則

第 20 条 本寄附行為は評議員会の決議及理事の同意に依り主務官庁の認可を得て之を変更することを得 但し其目的を変更することを得ず

III. 経 営 状 況

大正3年7月2日(1914)農業研究所の主要建物および施設の大略完成を機に、その設立者である大原孫三郎氏は財団法人大原奨農会の理事に就任し、翌々日研究所々長近藤万太郎氏をふくむ大原家関係者、木山精一、小山慎平、林醇平、大橋良平、林源十郎、原澄治の7氏が評議員に選任され、財団の運営にあたることになった。その後次表に示すように、評議員には若干の異動があったが、だいたい設立当初と同じような役員構成をもって昭和4年(1929)まで財団に関する主要事項の決済が行なわれた。

理 事	大原孫三郎 (1914—43)	
評議員	近藤万太郎 (1914—28)	林 源十郎 (1914—52)
	木山 精一 (1914—26)	原 澄治 (1914—52)
	小山 慎平 (1914—16)	三橋 玉見 (1918—37)
	林 醇平 (1914—21)	柿原 得一 (1922—48)
	大橋 良平 (1914—17)	木山巖太郎 (1926—35)

財団運営に必要な経費は設立時に寄附された約100町歩の小作地からあがる小作料と研究圃場の生産物などをもって支弁する計画が立てられていた。その額は大正3—5年頃は2万円内外であったが、米価の騰貴により、大正8年頃から13年(1919—24)頃までは約5万円程度になった。さらに、大正13年(1924)頃には預金利子などを含め年額およそ8万円の収入があったが、この年に園芸部や果樹園が廃止されたので、他の4部門の研究費はかなり潤沢になった。

このように当時の経常費は4乃至5部門の研究所としては他の公共農事

試験機関に比してかなり多額なものであったが、設立者はつねにこの研究所の充実を心をくばり、毎年多額の特別寄附金が寄せられた。すなわち、大正6年(1917)頃までは所内施設の新調整備に総計5万円の寄附があった。そして一応設備の完了した大正10年(1921)頃以降にも年額2万5千円程度の特別寄附金が寄せられた。これらの金は特殊な器具機械や図書購入のため、あるいは所員近藤万太郎、山口弥輔、松本圭一らの海外出張のため、所の要求に基づいて寛大に与えられたものであった。

その後大原奨農会の経営方針に再検討が加えられ、その目的を研究所一本にしぼることにし、昭和4年(1929)、丁度設立満15周年にあたって、名称を財団法人大原農業研究所と改めた。そして、研究員を設置するとともに、その互選により理事を選び、設立者の理事とはかつて、直接所の運営面にあたることとなり、また、主任研究員全部を評議員に加え、これによって、所内の主要者が研究だけでなく、所の運営面にも直接参加することになった。

さらに、昭和9年(1934)には所の所在地である倉敷市庁との連絡をも考え、市長を評議員に加え、また昭和13年(1938)、設立者の相続人大原総一郎氏も評議員として所の運営に参劃することとなった。昭和18年(1943)理事大原孫三郎氏が死去され、財団法人大原農業研究所の寄附行為の条文にしたがって大原総一郎氏が理事となって、研究所の経営にあたった。昭和9年から昭和20年の間の理事および評議員は次の如くである。

理事	大原孫三郎(1914—43)	大原総一郎(1943—52)
	近藤万太郎(1929—46)	西門 義一(1948—52)
評議員	薬師寺主計(1934—35)	板野 新夫(1934—48)

春川 忠吉 (1934—52)	古屋野橋衛 (1937—48)
西門 義一 (1934—47)	大原総一郎 (1938—41)
平松俊太郎 (1936—37)	大原 五一 (1938—52)
大森 実 (1936—38)	武内 潔真 (1939—52)
大杉 繁 (1937—52)	

昭和4年(1929)以降は法人の基盤も安定し、部の新設や廃止のこともなく、大体年間予算は7万5千円内外で、落ちついた研究が行なわれた。設立者からの寄附は昭和11年(1936)頃まで与えられ、それらは主として所員近藤万太郎、春川忠吉、西門義一らの海外出張あるいは留学のために用いられた。このほか、農林省から年間5—7千円の交付金を種々の研究のため支弁されていた。

昭和20年(1945)第二次世界大戦の終結に伴い、甚だしいインフレーションに加えて翌々22年(1947)に行なわれた農地改革により大部分の農地を解放するの止むなきに至ったので収入はほとんど皆無となり、他の公共機関に比べベースの低い職員の給与すら支払不能に陥るなど、経営極度に困難となり、さらに、理事近藤万太郎氏昭和21年(1946)死去と相次いで不運が重なり、一時はどうなるものかと不安が続いた。しかし、幸い理事大原総一郎、西門義一両氏の骨折りと、広く政、学会から林道倫、盛永俊太郎、星島二郎、森戸辰男氏等を評議員にわずらわし、これ等の人々の絶大な御協力により文部省から昭和23年(1948)約300万円、24、25年各500万円、26年400万円に及ぶ多額の補助金を受けどうやら運営することが出来たが、それらはほとんど職員給与にあてられたため、研究費の方は微々たるものであった。しかるに昭和24年(1949)岡山大学の開学によ

り、国立移管が問題となり、昭和26, 27 両年にわたって、財産を無償寄附し、岡山大学の研究機関となった。

最後に時代別研究所の事務系職員名をあげ、また、参考のため設立時、名称変更時、および岡山大学移管時の財産目録を次に掲げる。

事務主任

笹辺 親(1914—16), 秋田文一(1916—18), 大原十次郎(1918—24), 崎山市衛(1924—25), 山田孝使(1925—26), 坂本与三郎(1926—31), 飯田多嘉雄(1931—40), 小橋役雄(1940—41), 高谷吉太郎(1941—49), 村川圭四郎(1950—52)

その他

浅野佐次郎(1914—51), 三宅 寿(1926—52), 赤木菊野(1942—52), 三宅 長(1942—50), 友久君江(1944—50), 小川龍五郎(1925—51), 佐々木元七, 榎尾高一, 河野十太郎, 西出末子, 三好浩太郎, 三島ツルヨ, 内藤憲治, 森永三輔, 藤井 潤, 服部信隆, 孝忠庸一, 井関淑子, 岡田芳子, 奥田 哲, 武政豊太郎, 三宅亮太, 秋田文一, 内藤憲次, 牛本左太郎, 山根喜代造, 三宅亀夫, 月田悦子, 松本智恵香, 小野静江, 高橋幸恵, 梶谷益子

財 産 目 録

目	大正3年7月2日 現 在	昭和4年3月31日 現 在	昭和26年3月31日 現 在
土 地	53,117.110	89,662.62	61,025.19
建 物	5,055.000	23,970.00	36,131.85
機 械, 什 器		60,979.13	253,952.64
水道, ガス設備		6,219.27	6,219.27
図 書		134,713.37	824,445.41
基 本 預 金		162,728.14	1,472,644.89
仮 払 金		2,264.69	
未 収 入 金		741.32	
当 座 預 金		2,163.12	
振 替 貯 金		77.41	10,967.94
現 金		37.58	45,647.60
有 価 証 券			3,485,700.00
別 途 預 金			1,514,300.00
預 金			113,578.33
計	58,172.110	483,556.65	7,824,613.12

IV. 研 究 活 動

大原奨農会および大原農業研究所設立の主目的は、農業に関する重要課題を科学的に深く掘りさげて研究し、その成果を公表して実際農業に貢献することにあったことは寄附行為の初めにうたわれているとおりである。この目的達成のため、大原奨農会研究所の発足に先だち、農学の種々の分野における新進気鋭の人材を広く日本全国の大学や専門学校に求め、経費を出してそれぞれの地で研究を行なわせた。そして大正3年(1914)研究所が設立の運びに至ったので、近藤所長を中心として、種芸関係の研究のほか、病虫・園芸・農具・気象の分野を担当する研究員を置き、事業を開始した。研究態勢が逐次整いはじめた翌年、農芸化学研究担当の大杉繁赴任を機に、種芸部と農芸化学部の2部を設けた。そのうち、農具・気象担当の研究者が病気退職したので、大正6年(1917)にはこの方面の研究事業を打ち切った。その後病虫部は種芸部から独立し、さらに大正10年(1921)には研究態勢の整備拡充のため、昆虫部および植物病理部の2部となった。なお大正11年(1922)農政部が附設されたが、同14年(1925)には廃止となり、園芸部もまた大正13年(1924)に果樹園を他に移管し、所内の圃場を整理してその事業を停止するに至った。それ以後は種芸・農芸化学・病理および昆虫の4部門で引き続き研究が行なわれた。

昭和4年(1929)大原奨農会は財団法人大原農業研究所と改称されるに至り、事業目的が単純化し、かつ、必要な予算措置を伴う研究組織の充実が図られ、以後10余年間は安定した世情の中で熱心な研究が行なわれて多くの成果が挙げられた。

昭和16年(1941)以降は第二次世界大戦の余波をうけ、一方では戦時研究の要求などを受けつつ、他方では研究員や研究補助者の応召や徴用が相つぎ、ために多くの新しい研究者の採用が行なわれた。当時は研究用物資が不足し、生活環境も不良であったが、この困難にたえて熱心に研究が続行された。

昭和20年(1945)終戦とともに農地法が発動されて全部の小作地が奪われ、研究活動の主財源を完全に失った。その後数年は圃場生産物の売却金と文部省や農林省の研究補助金により仕事するの止むなきに至り、かつ、昔日の状態にもどす目途もなく、甚だしい苦難の状態に立ち至った。しかし、創立以来の旺盛な研究活動は広く各界から注目されており、昭和22年(1947)には中国新聞文化賞、昭和24年(1949)には朝日科学賞、昭和26年(1951)には山陽新聞社賞がそれぞれ授与されて、その功績が顕彰された。

なお、昭和24年(1949)国立大学制度の改革の際、昭和26、27の両年にわかれて、研究所は岡山大学に移管されることとなったが、これから再び昔日同様の活潑な研究が引続き行なわれるようになった。

以上、研究所のたどってきた道程をかえりみると、人員の構成や研究事項の両面から見て、大体次の3期が区別され、またこうした時代別の記述は、研究所の歴史の概要把握にも好都合と考えられるので、以下この時代別に、順次各研究部門の人員構成と活動状況を記すこととした。

前期：大原奨農会時代 大正3年—昭和4年(1914—29)

中期：大原農業研究所前期 昭和4年—昭和16年(1929—41)

後期：大原農業研究所後期 昭和16年—昭和27年(1941—52)

1. 種 芸 部

i. 前 期

研究所創設の頭初から死去に至るまで、所長であり、また、種芸部の主任であった近藤は東大卒業後大学院で種子学を専攻、明治44年(1911)にはドイツに渡り、ベルリン大学、ホーエンハイム大学でさらに種子の研究を重ね、大正3年(1914)1月帰朝、大原奨農会の設立事務に従事した。したがって、農林種子の研究は種芸研究室の創立以来その主要研究題目であった。各種農作物の種子の形態、記載、幼苗による品種鑑識、種子の寿命と貯蔵法の研究、種子の発芽生理の研究が行なわれた。これに関連して米の貯蔵、品質調査の仕事が始められた。その成果は“米穀貯蔵中における理学的性質の変化に関する研究”として発表され、これによって昭和2年(1927)日本農学会から農学賞が与えられた。

他方、近藤は稲および藺草の品種改良事業をも行ない、交雑法によって水稻品種若干を育成した。就中、吉神種は収量品質ともにすぐれたため広く近県の農家に普及をみた。また系統分離および実生選択法で藺草の改良を行ない、中でも大原藺3号は後に岡山近県の主要品種の一つである岡山3号の基本品種となった。こうした諸成果は斯界に貢献するところが大きかったので、大正11年(1922)その功に対し大日本農会から有効章が贈られた。

山口は稲の諸形質の遺伝、とくにその連鎖関係を研究してこの方面の指導標をたてた。また2、3植物の帯化現象の遺伝、生理について研究した。ヨハンゼンの精密遺伝学原理の翻譯もある。岡村は当時主として稲の

栽培法とくに苗代の研究を行なった。

三宅は研究所開設当時この部において主として農具・気象に関する研究を担任した。その業績としてとくに著名なのは、作物収量の推定法に関するもので、収量の誤差の大小の比較から、圃場の対角線に沿い坪刈を行なう方法を提唱した。この考えは農林省に引きつがれて普及され、当時広く日本の収量推定の基準法として用いられた。また螺旋選種器を考案し専売特許をとった。これは、ナタネ、大豆などの円粒種物の選別に至便なもので、研究所で指導作製させ販売された。また噴霧器のノズルの改良や鋼鉄鋳物製の除草用鋏（hoe）の改良製造なども行なった。

以上のように本期は種芸部としても草創の時であったにもかかわらず、すでに大きな業績をあげ、日本における農学研究の一中核たる基礎を確立した。昭和4年（1929）天皇陛下当地方行幸の折には、近藤は“稲および米”と題する御前講演を行なう榮譽を担った。

この時期における種芸部の職員構成は次の表の如くである。

研究員

近藤万太郎（1914—29）、三宅千秋（1914—17）、山口弥輔（1915—27）、

研究員補

武田元温（1916—24）

助手

池上耕平（1915—20）、野口保橘（1919—22）、岡村保（1922—39）、

藤本隅太（1923—27）、久宗壮（1925—29）

その他

木下勇、小野真盛、渡辺定志、鈴木重隆、奥山清一、安東保、
鳥海文彦

ii. 中 期

前期に引き続き、近藤は日本産の各種農作物品種の種子を広汎に集めて形態、発芽を調査し、かつ、種子に関する内外の諸文献を通読して、昭和8、9年（1933、34）には日本農林種子学前、後編を出版した。これは、日本はもとより諸外国にも類書の少ない、すぐれた著書で、今もなお種子学のコーランとなっている。なお、以前より万国種子検査会議に参加し、また、自ら温熱帯種子会議を主宰し、種子の国際的検査の基礎的知見の集積につとめ、日本における種苗法制定のための努力を払った。

この期間はまた米穀の貯蔵と品質研究に重点がおかれ、米の水分含量、温度と貯蔵との関係を明らかにし、その結果水分13%にまで米を乾燥することが米の検査基準として用いられるようになった。さらに密封貯蔵の有利性を説き、その実用化を押し進めた。

近藤と岡村は米の品質、ビタミンB含量の研究を行ない、茶米・青米・胴切米の発生原因、米の食味化学的研究などを進め、岡村はこれらの結果を集大成して米穀の品質に関する研究を公表し、昭和16年（1941）日本農学会から農学賞を授与された。

中沢とその後継者本庄は、近藤の指導下に、小麦と小麦粉の乾燥、貯蔵法、品質検定、および検査等級と小麦品質との関係につき広汎な実験を行なった。こうした精力的な実験研究の結果、当研究所は穀物学のメッカと見られるに至った。

このほか研究は、稲、麦をはじめ各種蔬菜類の光週反応、水稻の生育と水温との関係、小麦の穂発芽現象など栽培あるいは育種上重要な基礎的問題にまで及んだ。

本期の職員は次表のとおりである。

研究員

近藤万太郎 (1929—41), 岡村 保 (1938—39), 本庄益雄 (1939—41),
高橋隆平 (1939—41)

助手

岡村 保 (1929—38), 笠原安夫 (1929—34), 一色重夫 (1930—35),
中沢 敏 (1933—38), 寺坂侑視 (1934—37), 高橋隆平 (1935—39),
海野元太郎 (1939—41), 岡 彦一 (1940—41)

その他

村上憲平, 山崎寿賀 (1938—41), 三宅蒼子, 日笠初子

iii. 後 期

近藤は笠原や高橋の協力により, 苛性加里, 石炭酸, アルカリ類などによる稲, 大, 小麦の品種鑑別, 林木種子の貯蔵, 雑草種子の形態および発芽調査を行なった。

さらに, 近藤や貝原は小麦の貯蔵と品質, 米の低温下あるいはサイロ貯蔵について研究した。しかし, この期の末昭和21年(1946)に近藤は病没し, 種芸部長には高橋が就任した。

高橋は本邦および世界各地から多数の大麦品種や変異体を集め, その形態や生理の研究を行なった。その結果, 日本の大麦の大部分が渦性とよばれる半矮性遺伝子により特徴づけられ, この種類は日本中南部の多肥地帯に適応した日本固有型であることを明らかにした。さらに, 栽培大麦の品種を特徴づけている種々の遺伝子の地理的分布の規則性から, 栽培大麦が東亜および西域の2型に大別されることを示し, 祖先型野生大麦との関連において大麦の起原を推定した。この研究はその後いよいよ発展し, 高橋

は昭和29年(1954)日本育種学会から育種学会賞を、続いて昭和30年(1955)には倉敷市から市文化章を授与された。

笠原は以前から水田および畑地雑草の駆除を能率化するため、近藤の示唆にもとづいて、薬剤による雑草駆除試験を試みたが、戦後2,4-Dの輸入と共に、逸早くその実用化試験を重ね、その成果を普及した。一方、水田や畑地その他に生ずる雑草の種類同定、地理的分布、由来など雑草学の基礎的知見を加えた。こうした一連の広汎な実用的あるいは基礎的研究に対し、昭和26年(1951)岡山県文化賞、昭和28年(1953)には農林大臣賞および農業技術協会賞、さらに昭和32年(1957)には倉敷市文化章を得た。

本期は、他の部におけると同様前半には職員の応召が相つぐ一方、戦時研究の要求に即応のため人事の補充が多く行なわれ、また後半には所長の病没と戦後所の経営の不安定により、ともに人事の異動が極めてはげしかった。これらを次の一覧表に示す。

研究員

近藤万太郎(1941—46)、高橋隆平(1941—52)、笠原安夫(1949—52)、
貝原弘道(1949—51)

研究員補

徳田 巖(1943—47)、片山(杉本)平(1943—46)、小河原公司(1945—47)、
笠原安夫(1946—49)、貝原弘道(1947—49)

助手

笠原安夫(1938—46)、岡 彦一(1940—42)、海野元太郎(1941—43)、
貝原弘道(1942—47)、渡辺行弘(1942—47)、水田鉄雄(1943—45)、板
野弥寿夫(1943—47)、林(山本)二郎(1944—52)、山崎寿賀(1941—45)、

秋田史郎 (1944—46), 丸橋 渡 (1948—50), 池田正枝 (1947—52),
木下 収 (1950—52), 田村美郎, 武田博司, 木村忠司, 安田昭三,
伊藤直明

その他

池田正枝, 守屋(塩尻)勇, 日谷健三, 武田満子, 松村彰一, 木虎文子,
渡辺益子, 佐藤照子, 小山浩子, 石井豊子, 藤原澄子, 根津澄江,
木村久子

2. 農芸化学部

i. 前 期

本部は他部とやや異なり, 大杉が部長であった大正12年(1923)までを前期とするのが妥当のようである。

土壤肥料学の分野においては大杉が主として研究を進め, 土壤の酸性の由来, その作物成分に及ぼす影響, 施肥による影響, 土壤の接触作用などについて追究した。特に土壤の無機酸性に関する研究成果は本研究所の特別報告第1号としてその真価を世に認められたものである。この間, 大杉は植月, 曾山の共力をしばしば得た。

小野寺は植物に対する酸の作用を研究し, 次いで, 紫雲英の稲作に及ぼす影響を土壤肥料学ならびに分析化学の立場から研究して紫雲英施用上の有力な一指針たらしめ, さらに磷酸, 醋酸, 乳酸の定量法を研究した。

山本はもっぱら除虫菊の有効成分の研究を行ない, その成果は除虫菊の殺虫成分と題する同氏の学位論文となり, 宗定はイヌガンソクの成分やクチナシの色素について研究発表し, また植物体内の配糖体や酵素についても追究した。

別に, 大杉は生物の栄養に及ぼす石灰の影響, 膠質化学, または空中窒素の利用など, 将来の研究問題に対する解析的な指針をも与えている。

本期における農芸化学部の職員一覧表を次にかかげる。

研究員

小野寺伊勢之助 (1914—20), 大杉 繁 (1914—23), 山本 亮 (1916—18),
宗定哲二 (1920—21)

助 手

植月虎男 (1914—15), 山下 律 (1917—20), 中広 登 (1919—22), 曾
山直高 (1919—22), 末永重行 (1920—22)
高田定雄, 伊賀久真男, 塩谷惣次

ii. 中 期

前期に研究態勢の基礎を固めた本部が最も多方面に研究の手を伸ばした時期で、板野が部長をつとめた。

土壤肥科学方面では荒川の協力を得て板野が行なった稲田土壌の改良が注目される。土壌中のC-N率、水稻栽培期間中の土壌細菌の変移とその作用、土壌の profile、生産量と土壌のアノモニア、硝酸化成力ならびに脱窒素力との関係などを追究したものである。その他、荒川、松浦との共同で行なった板野式堆肥の試験や耕土の水素イオン濃度に関する研究、紫雲英栽培の土壤肥科学的的研究、あるいは自給肥料、販売肥料の調査研究など、また硫黄、食塩、沃土、鉄などと土壌肥料との関係など多くの業績がある。Winogradsky のアゾバクター試験法が土壌の肥沃度測定に役立つことを発表した。これらの殆んどは、前記荒川、または松浦、後半になって辻の協力を得て行なったものである。別に細田が本邦とくに大山原野の黒土について行なった試験研究も注目せらるべきものである。

本期に最も努力が集中された研究面は醗酵ならびに微生物方面である。これを大別すれば、(i) 窒素菌に関する研究、(ii) 繊維素分解に関する研

究，(iii) 肥料の微生物学的研究，(iv) その他に分けることが出来よう。

(i) においては，板野が松浦または辻の協力を得て行なった 荳科植物の根瘤菌に関する研究が代表的なもので，第 11 報まで及んでいる。(ii) では土壤或いは稲藁，粃の纖維素分解の研究に主力が注がれた。板野が荒川または松浦の協力を得て行なった。(iii) では，有機質肥料に関する微生物学的研究が第 3 報まで報告された。板野，荒川の協力による。(iv) では，板野が辻とともに行なった茶の微生物に関する研究が注目される。

分析化学の面でも，板野は単独で，または荒川，細田，松浦，辻，長谷川などの助力を得て幾多の研究を行なった。その中でも，水素イオン濃度測定法に関する一連の研究は，土壤肥料学的分野と関連して斯界に大きな貢献を果した。その他，塩素，マグネシウム，沃度などの分析定量法の研究や土壤成分の簡易な検定法の研究，土壤水分の迅速測定法の研究など，いずれも斯界に直接間接大きな影響を与えた。

また，茶葉中の沃度の分布や湯水に浸出する沃度量あるいは，寒天中の沃度など，また寒天の諸種物理化学的性質や，その微生物の生育に及ぼす影響など，食品化学方面における業績も多くあり，更に，除草剤に塩素酸カリを用いて有効なことを証明した研究成果は，日本において除草に薬剤を使用することのそもそもの起りと見るべきものであろう。

本期におけるこれらの研究活動は次の人々によって行なわれた。

研 究 員

板野新夫 (1924—39)，川口桂三郎 (1940—41)

助 手

荒川左千代 (1924—32)，細田克巳 (1924—26)，松浦 章 (1926—36)，

辻 康彦 (1932—38), 長谷川 武 (1936—37), 山本快二 (1940—41)

iii. 後 期

本部においても、後期は他部と同様に、研究対照が非常にしぼられてきた。すなわち、川口が部長である時は、土壌の研究に主力が注がれた。畑地状態土壌と水田状態土壌とにつき、その連繫或いは磷酸塩の動静、水田土壌における硫酸アンモニアの有害作用など、いずれも畑または水田における作物栽培上の基幹をなした。

川口の後を継いで小林が部長となつてからは小林の研究と小沢の研究とに2分化した。

小林は広く本邦各河川の水質の分析的研究を行ない、また灌漑水についても、鉍毒の原因と防除についても追究した。これらの結果は、水稻栽培の最も基本的な事項であり、本期以後に引続いて行なわれた研究とともに斯界に大きな貢献をなした故をもって、のちに山陽新聞社賞昭和32年(1957)、日本農学賞昭和33年(1958)、倉敷市文化章昭和34年(1959)を授与されるに至った。

小沢は武田などの協力を得て、本研究所研究員となつて以来、引続きペクチン酸酵に関する研究のみを追究し、本研究所が岡山大学に移管せられるまでに第11報まで発表した。これはその後も引続き行なわれ、その成果は農産製造部門に大きな貢献をなした。

この期には次の如く多くの職員が入れ替わり研究活動を行なった。

研究員

川口桂三郎 (1941—45), 小沢潤二郎 (1944—51), 森沢 皓 (1944—46),
小林 純 (1946—52)

助 手

山本快二 (1941—43), 小林 隆 (1946—48), 武田 晃 (1947—48), 三宅 博 (1949—50), 石井 葉 (1948—52), 大森常代 (1948—52), 内田 綱 (1948—52), 浦上佳子 (1947—52), 岡本賢一 (1951—52), 二島 哲, 井手ナオ, 渡辺忠義

そ の 他

岡本賢一 (1943—46), 浦上桂子 (1944—47), 宗沢 弘 (1947—49), 高見勝友, 守安美津子, 中野寛子, 渡部みさを, 佐伯妙子

3. 植物病理部

i. 前 期

植物病害に関しては西門ならびに笠井が研究員としてその研究態勢をつくりあげ、大正10年(1921)に独立した病理部となり、以後西門がその部長をつとめた。

笠井は植物の病害抵抗性、視外生物による植物の疾病、キュウリ、蘭草、馬鈴薯、コンニャク薯の病気について研究報告した。

一方、西門は早くから稲の病害について研究を始め、大正4—15年(1915—26)には農林省の補助により稲イモチ病防除に関する研究を行なった。また、稲ゴマ葉枯病については、各地産の菌を比較し、日米両国産の菌は形態的に顕著な差のあることを発見し、更に同病の予防法として種籾の温湯消毒を検討した。

この期の病理部の最も注目すべき研究成果は西門の行なった禾本科植物のヘルミントスポリウム病に関する研究であろう。すなわち、各種の禾本科植物のヘルミントスポリウム病の病徴、病原菌の分類および分布、ヘル

ミントスポリウム属菌の生理，ならびに種子消毒法について研究し，本病防除法の基礎を確立し，本邦農業界に大きな貢献をなした。その功績によって，西門は昭和6年（1931）日本農学会から農学賞を授与された。

このほか，植物病原菌の寄主体侵害法，種子消毒剤のウスプルン，榆の新病害，西瓜の蔓割病なども研究報告された。

本期の職員は次の通りである。

研 究 員

西門義一（1914—29），笠井幹夫（1919—26）

助 手

三宅忠一（1917—27），齊藤保一郎（1921—23），松本弘義（1926—29），

菅原 一（1927—29）

そ の 他

松原理太夫

ii. 中 期

本期は西門部長の下に，研究の手が諸種分野に伸べられた時で，稲馬鹿苗病，稲条斑病，稲小粒菌核病，あるいは小麦の条斑病，麦類の赤黴病，食用菌類などの研究が本期になって着手された。

稲馬鹿苗病の研究は，西門が単独又は松本，山内と共同で行なったもので，各地産の稲馬鹿苗病菌および類似菌を比較研究した結果，感受性植物は稲だけでないこと，異常生長を起こさせる菌は稲馬鹿苗病菌だけでないこと，異常生長効果は菌の系統によっても著しく異なることを明らかにした。

その他稲の病害については，西門，松本が稲熱病に対する稲の罹病性を，木村が菌類と変色粃との関係を追究発表した。

小麦の条斑病については、西門が松本，山内，樋口と共に研究し，本病の病原菌は新種であり，また本病は土壤伝染性であることを明らかにし，その予防対策を確立して斯界に大きな貢献をなした。

別に西門は昭和9年（1934）以来農林省の委託を受けて麦類のアカカビ病防除について研究を行なったが，本期では松本，山内，平田，木村と共に本菌の小麦苗に対する病原性の分化，子嚢形成などについて研究し，また種子の比重選によって子苗の被害をほぼ完全に防止出来ることを明らかにした。この研究は後期に引続いている。

食用菌類の研究も後期にまで引続いたが，その成果は見るべきものがあった。本期ではシイタケ菌が四極性であることを明らかにし，同菌の系統間交雑によって椎茸の品種改良を行なった。なお同茸ならびにマツタケ，シメジなどの人工栽培に関する基礎的研究も行なわれた。山内，樋口，木村が西門の協力者であった。

その他，木材の青変，無花果，ネムノキ苗，桜，マサキ，ボケ，西瓜などの病害，あるいは各種植物病原菌，菌核および病原菌類培養の生育期間と環境との関係などについて研究が行なわれた。

本期における病理部の職員構成は次表の如くである。

研究員

西門義一（1929—41）

助手

松本弘義（1929—35），山内巳酉（1932—35），平田幸治（1935—37），樋口達雄（1935—38），宮脇雪夫（1938—41）

研究生

木村勅二（1936—40），三橋 健

iii. 後 期

西門を部長とし、前期または中期の研究をさらに発展もしくは一応完了せしめたものも多い。

前期に始められ中期に中断されていた 稲胡麻葉枯病の研究が再開された。すなわち、西門は単独または中山と協同で本病の一次発生防止には種籾の冷水温湯処理が最も効果的なことを明らかにし、斯界に貢献した。

西門はまた中期に行なった稲馬鹿苗病の研究を中山とともに続行し、この菌による異常生長効果は菌の系統や環境条件によって著しい差異のあることを明らかにした。

その他稲の小粒菌核病と稲条斑病の研究が行なわれた。

麦の病害について注目すべき研究は中期に引続いて行なわれた麦類アカカビ病防除の研究である。西門は中山、山内または石井を協力者として伝染経路、侵入方法、侵入時期と品種との関係、抵抗性品種などを明らかにし、予防薬剤の撒布時期をも究明した。これらは本期以後に引続き行なわれた研究結果を併わせ、コムギのアカカビ病防除に関する研究という題目の下に農林省農事改良資料第 97 号（1958）として発刊された。

なお、本期の末に、西門は高橋、日浦とともに大麦のウドンコ病に対する抵抗性品種の研究を始めたが、これはその後日浦によって進展され、1959 年育種学会賞を受けるに至った研究の発端をなしたものである。

別に西門は大島、石井、森田とともに、トマトの青枯病に対して拮抗作用を有する 4 種の放射状菌を発見し、拮抗微生物利用による作物病害防除の可能性を示唆したことは注目に値する。

本期における病理部の大きな功績の一つは中期に引続き行なわれた食用

菌類の研究であろう。西門が木村，宮脇，三橋，中山などの協力を得て，シイタケ菌，ヒラタケ菌，マツタケ菌などについて行なったもので，その成果は，シイタケ，ヒラタケの人工栽培技術の改良発展に資した処すこぶる大きく，改良シイタケ菌，ヒラタケ菌の発売によって得た収益は戦後混乱期における当研究所の研究活動に大きな支柱となったものであり，また昭和23年（1948）岡山地方に天皇陛下行幸のみぎり，西門がシイタケ菌について御前講演をなす榮に浴するもとなつたものである。

このほか，病害予防薬剤の効果検定のためのスライド法，土壤放射状菌の生理，貯蔵甘藷の腐敗，*Alternaria* および *Fusarium* 菌による棉花の腐敗の防止法，あるいはクワイ，ハス，豌豆，チシャなどの蔬菜類，ボケ，キンモクセイなどの樹木類の病害などに関してそれぞれ精力的な研究が行なわれた。

このように，大正10年（1921）病理害虫部から病理部として独立して以来，終始その部長として研究活動の中心をなしてきた西門の功績は非常に大きく，よつて西門は昭和16年（1941）には大日本農会有功章，昭和23年（1948）には岡山県文化賞，昭和24年（1949）には倉敷市文化章を授与せられた。最後に，後期におけるこうした研究を行なった職員の一覧表を示す。

研究員

西門義一（1941—51），升本修三（1943—45），中山隆夫（1943—46），日浦運治（1947—51）

研究員補

中山隆夫（1940—43）

助手

宮脇雪夫 (1941—46), 日浦運治 (1943—47), 大島俊市 (1943—47),
石井 博 (1946—48)
(1949—50), 森田日出雄 (1948—51), 渡辺鶴子 (1947—51),
部田英雄 (1950—51), 井上成信 (1951—52)

その他

渡辺鶴子 (1944—47), 浅野達子, 金屋貞代, 逸見美代子, 岡田マス子,
清水景子

4. 昆 虫 部

i. 前 期

この部は初め病理研究室とともに病理害虫部をつくり、春川がその部長であったが、大正 10 年 (1921) 病理部と昆虫部とに分れ、引続き春川が昆虫部長であった。この間八木は数年にわたり研究員として独立の研究を行ない、また春川を助けた。

本部としては、岡山県が梨、桃の栽培地帯であることを反映し、その害虫に関する研究がまず取上げられたのは当然のことである。

特に、春川は梨姫心喰虫について、時に八木の力を借りて、その生態から防除法に至るまで詳細な研究を次期の初めに至るまで引続き行なったが、これは本期における害虫研究の中核をなした。別に近藤は同虫に対する硫酸ニコチンの防除効果を検討し、さらにナシミバチの生態については春川が研究した。

桃の害虫に対しては、春川は八木とともに 2 種の葉潜蛾の研究を行ない、春川は更にモモハバチを研究し、また冬期における介殻虫駆除に石灰硫黄合剤の有効なことを証明した。これら梨、桃の害虫に対する研究は当時の果樹栽培界に大きな貢献をなしたものである。

この期の第 2 の特色は、本期の末から始まった藺草害虫の研究である。

特に蘭葉蜂に関しては、熊代を協力者として生態に関する詳細な研究が行なわれ、防除に有力な指針が与えられた。同じく蘭の害虫オオオスグロハバチに関しても春川、熊代は生態的研究を行ない、その成果は中期早々に発表された。

稲の重要害虫である二化螟虫については、本期の後半期から研究に着手され、春川がその浸水駆除法の研究を行ない、2回に亘って報告し、その有効なことを示した。

その他、春川、八木、近藤のそれぞれによっていろいろの研究が行なわれたが、特に八木のダニの生活史ならびに家蚕のモザイクに関する研究は注目に値する。

この時代における職員は次のとおりである。

研究員

春川忠吉 (1914—29), 八木誠政 (1916—21)

助手

田辺忠一 (1918—20), 林 久雄 (1918—20), 熊代(近藤)三郎 (1923—29)

森戸嘉治馬 (1927—29)

ii. 中 期

昭和10年(1936)までは春川が、また11年からは土屋が部長となり、昆虫部の研究活動が最も多岐にわたった時期である。

本期の研究の中心は稲作害虫であった。特に二化螟虫に関しては、春川がときに高戸、熊代の協力を得て、恒温の蛹化、羽化および卵、幼虫、蛹の発育に及ぼす影響と、羽化不斉一の原因を詳細に追究し、春川の後継者たる土屋は同虫の蛹期の発育に及ぼす変温の影響を研究した。これらの成

果は二化螟虫発生予察法の確立に重要な基礎となり、後期における深谷の研究の出発点となったのである。

春川は別に、苗代害虫のユリミミズに対する防除法としてハナヒリノキを取り上げ、その毒性ならびに効果を究明し、その他駆除剤数種を比較し、ユリミミズの駆除に指針を与えた。春川はまた熊代の協力を得て、稲の切蛆に関する基本的生態と、麦圃におけるその防除法確立のための殺虫剤の施用とを追究し、熊代は蝗の研究を行ない、共に防除法実施の基盤たらしめた。

果樹害虫は前期ではほぼその研究を終え、報告の残部が梨姫心喰虫および梨皮潜虫について本期初めに見られるのみである。

蔬菜害虫では、春川が高戸、熊代とともに行なった種蠅の研究が注目される。生態のほか、防除法、寄生蜂の研究にまで及び、防除法として毒剤の有望なことを指示した。

貯穀害虫に関する研究も本期から始められ、春川は熊代とともに麦蛾の生態を研究し、防除法として乾熱の効果について試験し、その有効なことを証して防除の一指針たらしめた。また、燻蒸剤としてのクロールピクリンに関する詳しい研究も行なわれた。

藺草害虫の研究は前期で一先ず終わり、本期ではその初めに春川、熊代による報告が2篇出された。

その他、熊代によって昭和11年(1936)から昭和12年(1937)にかけて5篇の実験、観察、調査の報告がなされている。

これらを通覧し、本邦昆虫学界のようらん期から終始一貫、害虫防除という目的のため研究に邁進された春川の功績は非常に大きく、その教育界

につくした功勞と共に、春川は後年（1956）岡山県文化賞を授与されるに至った。

上記中期における職員は大体次のとおりである。

研究員

春川忠吉（1929—36），土屋 孝（1937—41）

助手

熊代三郎（1929—36），高戸竜一（1930—36）

その他

木虎幸子（1939—41），木虎文子（1940—41）

iii. 後 期

部長土屋は昭和18年（1943）病没し、その後は深谷が部長となり、昭和25年（1950）に至った。

この期は時局を反映し、研究の動向が特殊化して来たと見るべきで、研究対照は稲作と貯穀の害虫にしばられて来た。すなわち、深谷が春川、土屋の後をついで、ときには金子の助力を得て、二化螟虫の発生予察に関する基礎的研究を行なったが、これは第14報までに及ぶ詳細なもので、二化螟虫の発生予察法の確立に甚大な貢献をなし、学問的には幼虫休眠に関する理論など、学界に与えた功績は非常に大きい。その故を以て昭和25年（1950）日本農学会から農学賞を授与された。

貯穀害虫では米貯蔵上の大害虫であるコクゾウが研究対照となった。すなわち、土屋は小坂と共に穀象の耐熱性を実験し、またその生態特に蕃殖に及ぼす棲息密度ならびに性比を追究し、穀象防除の基礎資料たらしめ、引続いて深谷は防除法としてDDTを用いることの効果を検討し、その施

用は疑問であるとして当時のDDT偏重の風に警告を与えた。

別に土屋は小坂とともに、菜潜蠅の発生経過と生態を研究し、防除法の追究にまで至らんとしたが、不幸土屋の病没によりこれは途中で挫折した。

この時代における職員は大体次のとおりである。

研究員

土屋 孝 (1941—43), 深谷昌次 (1943—50)

助手

小坂和彦 (1942—47), 藤井一人 (1943—45), 小泉憲治 (1944—46),

金子 武 (1948—50)

その他

木虎幸子 (1941—44), 木虎文子 (1941—43), 中塚憲次, 坪井光子, 三島房子, 平城芳子, 岸田美澄里, 三島那美

5. 園 芸 部

園芸部設置の目的は、果樹、蔬菜、花卉の栽培研究および新技術の普及と併わせて、地方農家に模範の技術を展示することにあった。このため、前者については川又部長がこれに当り、後者はとくに桃栽培について広く名の知られた小山が担任した。川又は種々新しい蔬菜の導入試作をし、また花卉栽培を構内において行なった。とくに障壁を利用した片屋根式ガラス室を造り、この中でマスカットやコールマンなどの温室葡萄の栽培の研究を行ない、摘果、消毒、虫害防除などについて種々の考案をし、今日の“温室葡萄岡山”を築く基礎をなした。また、珍しい花や蔬菜は町民に親しまれ、この研究所が今日まで“農園”と愛称される因をなしたのである。

一方、模範果樹園造成に力を注ぎ、名田山（現在の向山）を開墾して果樹園を作り、小山がその主任として任務を遂行した。ここは、同氏の号、楽山の名をとり今もなお楽山園とよばれており、果樹とくに桃栽培の実地指導場であった。大久保はここで桃の品種改良に努め、大久保水蜜として現在ももっとも広く栽培されている水蜜桃新品種を造った。この方面の仕事に対し、桃や梨の害虫の生態および防除研究を行なった春川の功績が同時に考えられねばならない。

このように多くの業績をあげた園芸部はしかし研究所の都合で大正13年（1924）廃止のやむなきに至った。研究所開所以来この部で働いた職員は次の如くである。

研 究 員

川又綾之助（1914—16）、幸田 久（1916—24）、小山益太（1914—24）、
大久保重五郎（1914—24）

助 手

水河卓爾（1918—20）、杉田重雄（1918—22）、山本佳成（1922—24）

そ の 他

鳥取不可肆（1914—18）、林 房造（1920—24）、今城信次（1917—24）、
陶守省三郎、伊藤竜太郎、石原鉄太郎、今城勇士、小山 勉、石原
泰、中尾武夫、武政秀吉、東 吉次、馬場新良、篠原兵衛、吉岡政治、
氏本次郎太、小出三郎

6. 農 業 経 営 部

昭和16年（1941）吉岡が農林省の委託で農業経営研究を当研究所で行なうことになったのがこの部の発端である。吉岡は定金の助力を得て農業

経営的見地から作物の労働生産性向上を主眼として、機械化、省力栽培技術について、それを作物学面より研究を進め、主として水稻の直播栽培、麦の不耕（多株穴播）栽培の技術改善に努めた。

佐藤は農業の近代化、高度化について、寺田とともにまず当時の農家の実体を調査して経営学的に農業技術のあり方を批判するとともに、農業経営改善のために酪農の問題を取上げ、飼料作物の輪作体系について作物の飼料価値向上を目的に研究した。

しかしこの部は昭和 25 年（1950）吉岡が部長を辞任し閉鎖された。存置中のこの部の職員は下記の通りであった。

研究員

吉岡金市（1941—44, 1946—50）、佐藤二郎（1944—48）

助手

定金章（1941—51）、田中喜義（1944—46）、寺田由永（1944—47）、小林忠男（1948—50）

その他

則武尅夫（1946—51）、武鎗基生、上林直子、今田和子

7. そ の 他

以上にかかげたのは研究所の中核体としての各部の活動状況である。しかしこの研究所はもともと一定した規格、制度があったわけではなく、適当な人材で農業に関する問題を攻究したい人には自由に開放されていたので、開所以来、短期間ではあるがかなり違った分野の研究者が在籍した記録がある。それらの多くは成果の発表もないのでいまは詳細を知るすべもないが、以下に若干述べておくこととする。

その一つは、農業の研究は単に技術面だけではなく、農村における社会生活とか農民心理といった形而上の分野にもわたるべきであるとの初代大原理事の構想から出発して、この方面の研究が錦織によって行なわれた。また、農政係がおかれて有本英夫が主任となり大正11年から13年（1922—24）までこの仕事が行なわれたこともある。

このほか大原理事と深い関係のあった岡山孤児院にいた松本圭一が大正12年（1923）から4年間この研究所に在籍し、とくに南米移民の研究を行なった。松本は後に孤児を引きつれブラジルに渡り、農場経営の指導に当り、現在も同地で活躍している。このほか倉敷紡績の社員が、大杉の指導下に綿の繊維の物理化学の研究を行なったこともあり、さらに戦時中にはフィリピンにおける棉作指導増産のため、その指導員予定者が研究のため在籍したこともある。

8. 学位受領

最後にこの研究所において専心農学のそれぞれの分野において独創的な研究を行ない、その成果を集大成して学位を得た研究者の氏名とその研究論文題目をかかげる。この表に明らかなように、農学、理学、経済あるいは工学の博士の称号を得た者は22の多数に上り、その輝かしい業績は、この研究所を内外に誇る農学研究の殿堂たらしめたものであるといっても過言ではないであろう。

学位名称	氏名	学位受領年月日	学位受領大学名	論文題目
農博	近藤万太郎	大 4. 7. 3	東大	米穀貯蔵に関する研究
ク	大杉 繁	大 9. 3.19	東大	土壌の無機酸性に関する研究
ク	春川 忠吉	大14. 3.17	東大	梨の姫心喰虫に関する研究
ク	板野 新夫	大14. 6.19	東大	枯草菌(<i>Bacillus subtilis</i>)の蛋白質分解作用と培養地の水素イオン濃度との関係
ク	山本 亮	大14. 7.14	東大	除虫菊花の殺虫成分(英文)
理博	八木 誠政	大15. 7.31	京大	昆虫幼虫の成長曲線の分析
農博		昭26. 8.11	北大	鱗翅目の複眼の研究
理博	山口 弥輔	昭 2. 3. 5	東大	稲の交雑研究
農博	西門 義一	昭 3. 6.26	東大	日本産禾本科植物の葉枯病菌に関する研究
ク	小野寺 伊勢之助	昭 3. 7. 9	東大	紫雲英の土壌中における分解及び其の稲作に及ぼす影響
ク	細田 克己	昭12. 8.16	東大	本邦における所謂黒土の研究
ク	岡村 保	昭14. 2.23	東京農大	米穀の品質に関する研究
ク	川口桂三郎	昭20.12.12	京大	水田状態土壌中における還元現象に関する研究
ク	深谷 昌次	昭24. 2.14	東大	二化螟虫の発生予察に関する基礎的研究
農博	吉岡 金市	昭25. 2. 7	九大	農業労働の合理化に関する技術学的研究
経博		昭30. 3. 7	京大	日本農業の近代化に関する経済学的研究
農博	高橋 隆平	昭25.10. 6	北大	栽培大麦の地理的分化と起原に関する研究
ク	小沢潤二郎	昭30. 5.27	京大	ペクチン醗酵特にポリガラクトナーゼに関する研究
工博	武田 晃	昭31.12.28	京大	植物生長素性物質の合成に関する研究
農博	小河原公司	昭33. 3.29	京大	種子の光発芽に関する研究
理博	木村 勲二	昭33.11.18	東大	帽菌類における複相化の研究特にバラー現象における核の行動について(欧文)
農博	日浦 運治	昭34. 4. 7	九大	ウドンコ病に対する大麦品種の抵抗性に関する遺伝学的研究
ク	笠原 安夫	昭35. 3.10	東大	本邦耕地雑草に関する研究
理博	小林 純	昭35. 8.13	名大	日本河川の平均水質とその特徴に関する研究

V. 農業講習所および農学 講演会，講習会

農業講習所

財団法人大原奨農会の主事業は農業研究所であったが、農学校の設置なども行なうことが意図されていた。大正9年（1920）農業研究所の基礎が固まったので、農家の子弟を集めて普通教育の講習および農業に関する知識技術を講じ、農村の中核となる人物を養成して農事改善の一端に貢献する目的で、同研究所内に農業講習所が開かれた。

この講習所は大正9年4月1日開講，毎週，月，水，金に教育を施し，2カ年を修養年限と定めた。学生は40名とし，隔年募集を行なった。所長は農業研究所長がこれに当り，講師は研究員がその主体をなし，その他若干名の人が所長の依嘱によってこれを担任した。大正11年（1922）第2回生を募集し，教育を施したが，たまたま大正13年（1924）には大原奨農会の事業内容が検討されて，研究活動に専念することが確認されたため，農業講習所は2回の卒業生を世に送っただけで中止されるに至った。

講演会，講習会

大原孫三郎氏は学術知識普及のため，倉敷日曜講演を設立し，その第1回を明治35年2月14日（1902），当時の岡山県知事檜垣直右氏，法学博士仁保亀松氏を招いて開催，爾来明治40年4月（1907）第50回におよぶまでほとんど毎月これを開催し，社会各方面にわたり学者名士の講演を行なったが，第50回以後は更にやや長期間の講習を行なうことが有利であ

ることを認め、従来開催していたものは随時とし、冬期または夏期に5日ないし10日間にわたる講習会ようの大講演会を開くこととし、大正3年5月(1914)まで12年間、回を重ねること実に67回、附属大講演会を5回まで継続した。そして、同年7月財団法人大原奨農会の設立に当り、その事業の一つとして日曜講演をこれに引き継ぐことにした。

つづいて農業研究所は設立を記念するために大正4年(1915)以来毎年1回農学に関する講演会または講習会を開催した。大正5,6,7年には毎回1日間倉敷市において農学講演会を開催したが、大正8年(1919)以来講習会とし、8年には倉敷市で3日間、9年には岡山市で5日間、その後毎年同じく岡山市において3—5日間農業講習会を開催した。講師は主として当研究所の職員をあて、各自の研究発表を骨子としたが、これを契機として他より学者を招いてその学説を聞くことも同時に行なった。聴講生は主として岡山県および隣県の農業技術員、農業教員等であった。

昭和4年(1929)は研究所創立満15周年にあたり、7月6,7日に倉敷市において農学会、札幌農林学会、日本農芸化学会、土壤肥料学会、林学会、日本畜産学会、農業経済学会、日本作物学会、園芸学会、東京昆虫学会、日本植物病理学会、水産学会、関西病虫害研究会の13学会の連合臨時大会を開催した。参会者実に400名に達し盛会をきわめた。

昭和9年7月(1934)には研究所創立満20周年を記念して文学博士谷本富氏を招いて6日岡山市、7日倉敷市において学術講演を開催した。

その後も引き続き毎年農業講習会を開催したが、昭和22年(1947)農地法により財産の大部分(農地)を解放したため、研究所はその経営困難と

なり，昭和 26 年（1956）岡山大学へ寄附されることになった。ここに，設立以来約 40 年間幾多の著名学者を輩出した当研究所の解散を記念して，昭和 28 年（1953）倉敷市において一橋大学長中山伊知郎博士，東京大学農学部教授東畑精一博士を招いて大講演会を開催した。

VI. 農 業 図 書 館

大原孫三郎氏は農業の専門図書館を設立して、農業研究所職員の研究を促進し、かつ、広く農学の発展に寄与するため、大正10年(1921)農業研究所構内中央にコンクリート煉瓦建三階延93坪の書庫と、閲覧室、製本室の合計18坪の木造一階建を併置し、大原奨農会に寄贈された。それで、従来同会応接室の一隅にあった図書室の図書1,000余冊を移し、引続き大規模かつ急速に図書館の充実に努力した。それに要した経費は莫大なものであったが、それはすべて大原氏の特別寄附金によってなされたものであって、日本における農業に関する図書館の中でもっともよく充実したものの一つといわれる今日の農業生物研究所の図書館の基礎となった。

図書収集について特記すべきものをあげると次のようである。大正9年(1920)ドイツのライプチヒ大学植物学教授 プェッファー博士が死去され、翌年同氏の遺書が売られることを聞き早速全1万2千冊をとりまとめ購入した。続いて研究員山口弥輔が大正11年から13年までドイツに留学し、その間多量の図書を購入した。また大正12年には研究員西門義一および嘱託松本圭一の両名が中国に渡り、農業および植物に関する漢籍を広く収集した。大正11—13年(1922—24)の間に投じた図書費を一例としてあげると次の如くである。

大正11年	30,000円
同 12年	13,000円
同 13年	11,000円

以上は購入した図書に関するものであるが、日常交換あるいは寄贈によ

って収蔵した書誌類の数もすこぶる多い。活潑な研究活動と和文および欧文報告の規則的な発行がもとではあるが、積極的な当研究所刊行物との交換業務は図書館の充実に大きな力となったことはいうまでもない。これらの中には、本邦唯一といわれる文献も含まれている。いま、昭和27年（1952）当時の寄贈を受けた雑誌や報告類の数を国別に示すと次の如くであって、日本809種、諸外国45カ国800種の多きに達する。

日 本 (809)	米 国 (360)
カ ナ ダ (13)	キ ュ ー バ (2)
アルゼンチン (11)	ブ ラ ジ ル (11)
メ キ シ コ (2)	コ ロ ン ビ ア (1)
ペ ル ー (1)	ス リ ナ ム (2)
中 華 民 国 (3)	イ ン ド (15)
マ ラ イ (4)	イ ン ド ネ シ ア (7)
フィリピン (5)	タ イ (1)
オーストラリア (23)	ニ ュ ー ギ ニ ア (1)
ニュージーランド (5)	エ ジ プ ト (3)
トランスバール (10)	マ ダ カ ス カ ル (1)
ケ ニ ヤ (3)	オ ー ス ト リ ア (11)
ベルギー (13)	デ ン マ ー ク (8)
英 国 (47)	エ ス ト ニ ア (2)
フィンランド (9)	フ ラ ン ス (27)
東西ドイツ (6)	ギ リ シ ャ (2)
オ ラ ン ダ (18)	ハ ン ガ リ ー (10)

イ タ リ ア (39)	ラ ト ヴ ィ ア (2)
ノ ー ル ウ ェ ー (4)	ポ ー ラ ン ド (31)
ポ ル ト ガ ル (5)	ル ー マ ニ ア (3)
ス エ ー デ ン (19)	ス ペ イ ン (9)
ス イ ス (14)	ト ル コ (1)
チ ェ ッ コ ス ロ ヴ ァ キ ヤ (23)	ユ ー ゴ ス ラ ヴ ィ ア (4)

以上 46 カ 国 (1609)

つぎに、大正 15 年 (1926) および昭和 27 年 (1952) 岡山大学へ移管した当時の蔵書数を次に示す。これらの総額は 12 億余円に見積られるという。

	大正 15 年	昭和 27 年
洋 書	32,210	71,257
和 漢 書	9,006	43,173
蔵 書 総 数	41,216	114,430

これら諸雑誌の内容はここに紹介する余白がないが、次の蔵書目録によって承知されたい。

岡山大学大原農業研究所蔵書目録 (I) 本邦雑誌の部. 96 頁. (1953 年 3 月)

List of the Foreign Periodicals in the Library of the Ohara
Institute for Agricultural Biology. pp. 164. (March, 1956)

書籍については目録の刊行が不可能で、その内容は直接照会されるよりほかに方法がないが、特異な図書として次のものを挙げることができよ

う。

ペッカー文庫（書籍，雑誌，別刷をふくむ） 11,730冊

漢 籍 4,884冊

昆陽漫録（青木昆陽自筆） 全 8 冊

Ettinghausen, C. F. v. und A. Pokorny: *Physiotypia Plantarum
Austriacarum. Ser. I & II, Bd. 1—12, Tafeln Bd. 1—2.*

Wien und Prag, 1873.

急速な図書数の増加によって、図書館設立当時の書庫だけでは収容不能に陥ったので、昭和の初めに約 30 坪の仮書庫が附設されたが、昭和 27 年 4 月（1952）岡山大学への移管の際、大原総一郎氏の篤志寄附により鉄筋コンクリート三階建 50 坪の書庫が従前の書庫に連結して建てられ、また閲覧室および図書事務室の改築が行なわれ、これらと図書整理室（旧農業講習所建物）をあわせて 3 つの建物が中庭を擁するごとく整理され、面目を一新した。

最後に、この図書館創設当初から昭和 15 年（1940）までは石原が、その後は高橋が司書として下記のように常に 1 名の協力者とともに図書館事務一般の仕事を遂行して来たことを附記する。

司 書

石原一直（1920—40），高橋良平（1940—52）

そ の 他

高橋良平（1923—40），友杉幸夫（1939—43），田中加世子（1943—47），

藤原京子（1947—51），守屋啓子（1950—52），

VII. 財団法人大原農業研究所の 解散と新財団の設立

既にしばしば述べたように、第二次世界大戦後、昭和22年(1947)に行なわれた農地解放のために運用基本財産の農地を大部分失った当研究所はたちまち経営困難に陥ったが、文部省そのほか各方面の絶大な支持援助を受けて細々ながらもその事業を続けつつあった。別に昭和24年国立学校設置法により岡山大学が設立されるに及び、本研究所もその有力な構成部門となるべく望まれ、ついに昭和26年3月(1951)その一部が、次いで昭和27年4月残部が岡山大学農学部附属大原農業研究所として発足するに至った。これは更に昭和28年(1953)に大学附置研究機関に昇格し、岡山大学農業生物研究所として現在6部門を有し、昔日に勝るとも劣らない研究活動を続けつつある。

財団法人大原農業研究所はその研究用資産の大部分と事業の全部を岡山大学に移管したので、昭和28年(1953)解散したが、その遺留財産が若干あったので、これから上の利益を主として岡山大学農業生物研究所の研究の後援資金とすべく、清算を行ない、昭和32年(1957)新たに財団法人大原奨農会を設立した。

その寄附行為中、目的および事業のみを抜萃して次に掲げる。

第2章 目的および事業

第3条 この法人は、農業生物に関する学理およびその応用に関する研究を助成し、その研究成果を普及奨励して、農業の発達に寄与することを目的とする。

第4条 この法人は、前条の目的を達成するために次の事業を行なう。

1. 岡山大学農業生物研究所が行なう研究の助成および斡旋
2. 農業生物に関する研究成果の公開普及および出版
3. 農業生物に関する講演会、研究発表会および展示会等の開催ならびに協力
4. その他前条の目的を達成するために必要な事業

なお、旧財団を清算して新財団に引継がれた当時の資産を参考のために次に掲げる（昭和32年2月26日現在）。

資 産 総 額 計	7,468,256円
基 本 財 産	3,724,649円
土 地	3,524,649円
基 本 金	200,000円
運 用 財 産	3,743,607円
土 地	3,693,607円
現 金	50,000円

新財団の役員は次のとおりである。

理事長	大原総一郎（1957—）	
理 事 (兼評議員)	西門 義一（1957—）	高橋 隆平（1957—）
	原 澄治（1957—）	小林 純（1957—）
	清水 多栄（1957—58）	杉山 章平（1959—）
監 事	豊島 武治（1957—）	小坂 哲二（1957—）
評議員	原 玄太郎（1959—）	木村長三郎（1959—）

(附記) 岡山大学農業生物研究所の現状

さて旧財団法人大原農業研究所の主事業である研究活動はその後身である岡山大学農業生物研究所に引継がれたわけであるが、その当時は植物病理部、害虫部、作物生理部、作物遺伝部、生物化学部の5部門であった。昭和35年(1960)微細気象部が新設され、現在6研究部門1事務部の下に研究活動が続けられている。その概略を示すと次のようである。

所 長 杉山章平

(事務部) 事務長 小坂哲二, 庶務係長 岡本芳郎

会計係長 長尾吉男, 図書係長 高橋良平

植物病理部 作物の病原菌およびウイルス防除の基礎的研究, 作物耐病性の研究

教授 日浦運治, 助教授 井上忠男, 助手 部田英雄
助手 井上成信

害虫部 農業害虫の防除に関する基礎的研究

教授 杉山章平, 助教授 安江安宣, 助手 松本義明
助手 河田和雄

作物生理部 栄養生理, 作物栽培環境の研究

教授 小林 純, 助教授 笠原安夫, 助手 定金 章
助手 森次益三

作物遺伝部 作物の遺伝および育種の基礎的研究, 品種の分化研究

教授 高橋隆平, 助教授 安田昭三, 助手 林 二郎

生物化学部 酵素, 植物ホルモンならびに防除化学の研究

教授 小沢潤二郎, 助手 岡本賢一, 助手 鈴木幸雄

微細気象部 微細気象の基礎的ならびに実際研究, 植物気候の研究

教授 高須謙一, 助手 山口信之

附. 研究発表

ここに掲げた目録は、本研究所から発行された(1)農学講演集(第5巻まで)、(2)農学研究(前者の改題、第6巻より始まる)、(3)大原農業研究所特別報告(略記;特別報告)、(4)Berichte des Ōhara Instituts für landwirtschaftliche Forschungen(略記;Ber. Ōhara Inst.)に載せられた報告のみを集録したものである。研究者の所属する学会の機関紙その他に登載せられた業績も多々あるが、之は一切割愛した。

a. 記載方式は次のようである。

氏名. 年号. 題目. 記載誌名. 巻.

例 大杉繁. 1920. 土壌の肥瘠. 農学講演集2.

b. 報告が数篇に分れているときは第1報と終報のみの年号, 巻数を記す。その他の場合も之に準ずる。

例 岡村保. 1934—'36. 米の形質とビタミンB含量との関係, I—III. 農学研究 22—26.

c. 報告が数篇にわたり, そのときどきに共著者がかわるときは, 共著者名を発表順にカッコ内に入れた。

例 近藤万太郎(一色重夫, 寺坂侑祝, 高橋隆平). 1935—'37. 玄米の火力乾燥試験, I—III. 農学研究 25—28.

d. 題目が多少異なっても, 内容的に続報と見做し得るときには, 初めの題目の続きとした。

e. 発表年代順に列記し, 同年代のときはアルファベット順とした。

1. 種芸部業績

i. 種子学

近藤万太郎. 1918. 種子検査論. 農学講演集1.

- 近藤万太郎. 1920. 農業種子汎論, 特に其の改善に就きて. 農学講演集 2.
- . 1926. 種子寿命論. 農学研究 8.
- . 1927. 種子の発芽生理一斑. 農学研究 11.
- . 1931. 第 5 回万国種子会議報告並びに種子検査国際規程. 農学研究 17.
- , (笠原安夫, 寺坂侑視). 1934—'44. 雑草種実の研究, I—IX. 農学研究 24—36.
- , 笠原安夫, 一色重夫. 1936. 17, 8 年間水中にありし紫雲英の硬実の次世代の種子に就きて. 農学研究 26.
- , 一色重夫. 1936. 種子の吸収力に関する実験, I—II. 農学研究 26.
- , (高橋隆平, 笠原安夫). 1938—'42. フェノール着色法による小麦の品種鑑識, I—III. 農学研究 30—34.
- 高橋隆平. 1938. 小麦粒の後熟に関する 2, 3 の実験. 農学研究 29.
- . 1938. 紫雲英硬実の吸水膨脹と温度との関係. 農学研究 30.
- 近藤万太郎, 笠原安夫. 1939. 小麦, 大麦のフェノール着色の原因並びにバラクレゾール, ベンチン等の着色反応に就きて. 農学研究 31.
- , ————. 1939. フェノール着色と大麦の品種鑑識. 農学研究 31.
- , (高橋隆平, 寺坂侑視, 笠原安夫). 1941—'44. 林木種子の貯蔵試験, I—III. 農学研究 32—36.
- , 笠原安夫. 1941. 雑草種子の発芽の研究, I—II. 農学研究 32.
- , (笠原安夫, 海野元太郎). 1941—'42. 米の品種鑑識の研究, I—VIII. 農学研究 32—34.
- 寺坂侑視. 1941. 胚の位置異常なる米に就きて. 農学研究 32.
- 近藤万太郎, 笠原安夫. 1942. チロシンによる小麦の品種鑑識. 農学研究 34.
- 笠原安夫. 1944. 種実の発芽促進及び抑制に関する物質に就いての実験的研究, I. 農学研究 36.
- , 秋田史郎. 1948. 神樹種実の発芽促進に就きて. 農学研究 37.
- 近藤万太郎, 笠原安夫, 秋田史郎. 1950. 19 年間貯蔵せる大麻種子の発芽及び其の植物の生育に就いて. 農学研究 39.

- Kondō, M. 1917. Untersuchung der Samen der in Japan vertretenen Brassicaarten. Ein Beitrag zur genauen Feststellung der Sortenunterschiede. Ber. Ōhara Inst. 1.
- . 1918. Über Nachreife und Keimung verschieden reifer Reiskörner (*Oryza sativa* L.). Ber. Ōhara Inst. 1.
- . 1918—'28. Über die in der Landwirtschaft Japans gebrauchten Samen, I—VII. Ber. Ōhara Inst. 1—3.
- . 1926. Über die Dauer der Erhaltung der Keimkraft bei verschiedenen Samenarten in Japan. Ber. Ōhara Inst. 3.
- . 1926. Über die Einwirkung des Kalks auf die Erhaltung der Keimkraft von Sämereien. Ber. Ōhara Inst. 3.
- . 1926. Über die Erhaltung der Keimkraft von Sämereien und über Trocknungsmittel. Ber. Ōhara Inst. 3.
- . 1929. Über die harten Samen von *Astragalus sinicus* L. und *Robinia pseudacacia* L. Ber. Ōhara Inst. 4.
- , Kasahara, Y. 1933. Versuche bezüglich der Aufbewahrung der Sporen von Shiitake, *Cortinellus Shiitake* Schroet. Ber. Ōhara Inst. 6.
- , ———. 1935. Vergleichende Untersuchungen über Aschenbilder der Speizen von *Chaetochloa*, *Panicum*, *Echinochloa*, *Sacciopsis* und *Syntherisma*. Ber. Ōhara Inst. 6.
- , (Kasahara, Y., Terasaka, Y.). 1935—'42. Untersuchungen über Unkrautsamen Japans, I—VIII. Ber. Ōhara Inst. 6—9.
- , (Takahashi, R., Terasaka, Y.). 1936—'38. Berichte über die Tätigkeit des Ausschusses für die Samen der warmen Klimate, I—VI. Ber. Ōhara Inst. 7—8.
- , (Isshiki, S., Takahashi, R., Terasaka, Y.). 1937—'38. Untersuchungen über die Ährenkeimung des Weizens, speziell in den

- klimatischen Verhältnissen Japans, I—III. Ber. Ōhara Inst. 7—8.
 Kondō, M, (Takahashi, R., Kasahara, Y.). 1938—'41. Feststellung der Sortenechtheit des Saatgutes des Weizens durch Phenolfärbung, I—II. Ber. Ōhara Inst. 8.
 ———, Kasahara, Y. 1941. Feststellung der Sortenechtheit des Saatgutes der Gerste durch Phenolfärbung. Ber. Ōhara Inst. 8.
 ———, ———. 1941. Ursache der Phenolfärbung von Weizen- und Gerstenkörnern. Anhang: Behandlung mit Paracresol, Benzidin usw. Ber. Ōhara Inst. 8.
 ———, ———. 1942. Untersuchungen über die Keimung der Unkrautsamen Japans, I—II. Ber. Ōhara Inst. 9.
 ———, ———. 1943. Alkaliprüfung der polierten Weissreiskorner. Ber. Ōhara Inst. 9.
 ———, ———. 1943. Feststellung der Sortenechtheit des Weizen-saatgutes durch Tyrosinfärbung. Vergleich mit Phenolfärbung. Ber. Ōhara Inst. 9.
 ———, ———. 1943. Feststellung der Sortenechtheit von enthülsten Reiskörnern, I—IV. Ber. Ōhara Inst. 9.

ii. 米 麦 の 貯 蔵

- 近藤万太郎. 1923. 米穀貯蔵に関する研究. 農学講演集 5.
 ———. 1925. 米穀貯蔵に関する研究. 特別報告 2.
 ———, 岡 村 保. 1929. 玄米貯蔵中の温度並びに玄米の水分含量と玄米の発芽力保存との関係に就きて, I—II. 農学研究 13.
 ———, ———. 1930. 米穀密封貯蔵研究. 農学研究 16.
 ———, ———. 1931—'32. 温度並びに米の乾燥度と米粒間隙の湿度との関係に就きて, I—II. 農学研究 17—18.
 ———, ———. 1932. 明治 37 年並びに 39 年産密封貯蔵米の研究. 農学研究 19.

- 近藤万太郎, 岡村 保. 1932. 玄米の日照乾燥に就きて, I. 農学研究 19.
- , ————. 1932. 俵装貯蔵米の物理的並びに生化学的研究一例. 農学研究 18.
- , ————. 1932. 乾燥度を異にせる玄米中のビタミンB含量に就いて. 農学研究 18.
- , ————. 1932. 玄米の発芽力とビタミンBとの関係. 農学研究 18.
- , ————. 1932. 玄米の貯蔵中の温度, 水分含量及び乾燥剤加用と玄米の発芽力保存との関係に就きて. 農学研究 18.
- , 一色重夫, 笠原安夫. 1932. 米穀並びに倉庫の乾燥と除水量. 農学研究 18.
- , 岡村 保. 1933. 密封貯蔵米の水分と米質の生化学的变化との関係につきて (詳報). 農学研究 20.
- , ————. 1933. 俵米貯蔵中に於いて肌擦が米の物理的性質の変化に及ぼす影響. 農学研究 20.
- , 笠原安夫. 1933—'34. 椎茸胞子の貯蔵に就いての実験, I—II. 農学研究 20—22.
- , 岡村 保. 1933. 秋田感恩講並びに山口県勝間田家貯蔵の古粳米の研究. 農学研究 21.
- , (岡村保, 寺坂侑視, 高橋隆平). 1934—'41. 玄米を缶に入れ乾燥剤を添加したる貯蔵試験, I—V. 農学研究 22—32.
- , (岡村保, 高橋隆平, 寺坂侑視, 貝原弘道). 1934—'44. 米穀のサイロ貯蔵の実験, I—IV. 農学研究 23—36.
- , 一色重夫. 1934. 貯蔵米穀の乾燥用として生石灰, 塩化石灰及び其の他の価値比較. 農学研究 24.
- , 岡村 保. 1934. 23年間山地に貯えられたる糠に就きて. 農学研究 22.
- , ————. 1934. 温度特に冷凍と米穀の乾燥との関係. 農学研究 22.
- , ————. 1934. 温度の高低と米の剛度との関係. 農学研究 22.

- 近藤万太郎，一色重夫。1934。無胚米並びに多胚米の出現，性状及び遺伝に就きて。農学研究 22。
- ，（一色重夫，寺坂侑祝，高橋隆平）。1935—'37。玄米の火力乾燥試験，I—III。農学研究 25—28。
- 中沢敏。1935—'38。小麦の水分含量並びに貯蔵方法が小麦の貯蔵中に於ける性状の変化に及ぼす影響，I—IV。農学研究 25—30。
- 近藤万太郎，岡村保。1936—'37。粳米貯蔵と玄米貯蔵との米質変化の比較，I—II。農学研究 26—27。
- 中沢敏。1936—'37。倉庫の状態が貯蔵小麦の品質に及ぼす影響，I—II。農学研究 26—28。
- 岡村保。1936。乾燥剤使用法に関する一所見。農学研究 26。
- 近藤万太郎，岡村保。1937。乾燥不良米の貯蔵と温度との関係。農学研究 27。
- ，———。1937。佐賀県に於いて約 100 年間貯蔵せられたりと伝うる古粳米の研究。農学研究 27。
- 中沢敏。1937。収穫当時の乾燥方法が小麦の貯蔵に及ぼす影響。農学研究 27。
- 。1937—'38。小麦の火力乾燥試験，I—III。農学研究 27—29。
- 。1937。一重俵小麦貯蔵試験。農学研究 28。
- 。1937。小麦の日照乾燥と火力乾燥との貯蔵比較試験，I—II。農学研究 28。
- 岡村保。1937。多湿米の貯蔵と貯蔵温度との関係。農学研究 28。
- 中沢敏。1938。小麦の密封貯蔵試験。農学研究 30。
- 岡村保。1938。長野県川中島村中山氏貯蔵の 105 年前の古粳米に就いて。農学研究 30。
- 。1938。約 100 年及び 70 年前の古粳に就いて。農学研究 30。
- 近藤万太郎。1939。乾燥不良米の 5 カ年半の低温貯蔵に就きて。農学研究 31。
- ，岡彦一。1939—'43。小麦の防湿紙袋貯蔵試験，I—III。農学研究 31—35。
- ，（中沢敏，本庄益雄，岡彦一）。1939—'43。貯蔵小麦の水分含量及び貯

- 蔵温度が小麦の品質に及ぼす影響, I—V. 農学研究 31—35.
- 近藤万太郎, 高橋隆平, 寺坂侑視. 1939. 白米及び7分搗米の貯蔵並びに缶, 俵装, 防湿紙袋等の貯蔵効果に関する試験. 農学研究 31.
- , 一色重夫, 寺坂侑視. 1941. 食塩添加が米穀貯蔵に及ぼす影響. 農学研究 32.
- , 笠原安夫. 1941. 種子の10カ年貯蔵の例. 農学研究 32.
- , 寺岡侑視. 1942. 米穀の低温長期貯蔵試験. 農学研究 33.
- 海野元太郎. 1942. 塩化コバルト紙に依る玄米の簡易水分検定. 農学研究 33.
- 近藤万太郎, 笠原安夫. 1943. 米穀の13カ年貯蔵とその水分含量との関係. 農学研究 35.
- , 岡彦一. 1943. 小麦粉の貯蔵試験. 農学研究 35.
- , 貝原弘道. 1944. 小麦の密封貯蔵試験(続報). 農学研究 36.
- , 水田鉄雄. 1944. 玄米の保米袋貯蔵試験に就きて. 農学研究 36.
- 貝原弘道. 1947. 収穫当時の火力乾燥方法と小麦の貯蔵力との関係. 農学研究 37.
- . 1947. 10カ年缶貯蔵の小麦の品質調査. 農学研究 37.
- 近藤万太郎. 1947. 15カ年密封貯蔵玄米の性状調査. 農学研究 37.
- . 1947. 津山市末沢氏貯蔵の明治3年産古糯粳の研究. 農学研究 37.
- . 1947. 米穀の低温長期貯蔵試験(11カ年貯蔵). 農学研究 37.
- , 貝原弘道. 1948. 玉蜀黍, 裸麦, 小麦及び玄米の貯蔵力の比較に就いて. 農学研究 37.
- , 岡彦一. 1948. 穀物の通気サイロ貯蔵に関する研究. 農学研究 38.
- 小河原公司. 1948. 生鮮蔬菜の貯蔵に関する研究, I. 農学研究 37.
- Kondō, M., (Okamura, T., Isshiki, S., Terasaka, Y., Takahashi, R.). 1926—'38. Storage of rice, I—XX. Ber. Ōhara Inst. 3—8.
- , Okamura, T. 1932. Über die Beziehung zwischen der Temperatur sowie dem Wassergehalt der Reiskörner einerseits und der Feuchtigkeit der Zwischenräume der Körner andererseits. Ber. Ōhara Inst. 5.

Kaijara, H. 1951. Comparative storage-tolerance of some cereal grains in Japan. Ber. Ōhara Inst. 9.

iii. 穀物の性状

近藤万太郎. 1918. 玄米品質論. 農学講演集 1.

岡村 保. 1927—'35. 茶米に就きての研究, I—III. 農学研究 10—25.

藤本 隅太. 1929. 栽培地と栽培時期とを異にせる粳米及び玄米の物理学的性質に就きて (予報). 農学研究 13.

近藤万太郎, 岡村 保. 1930. 粳米貯蔵に関する今摺米の乾燥研究. 農学研究 14.
———, ————. 1930. 吸湿に因る胴割米の成生に就きての實驗的研究. 農学研究 15.

———, ————. 1930. 青米に就きての研究. 農学研究 15.

———, ————, 久宗 壯, 奥山 清一. 1930. 生粳米, 乾燥粳米並びに玄米の数量的相互關係. 農学研究 15.

———, ————. 1932. 玄米が吸湿せし時の膨脹の方向と胴割米成生との關係. 農学研究 19.

岡村 保. 1933. 糯米及び粳米のビタミンB含量の比較研究. 農学研究 20.

———. 1933. 螟虫被害茎米のビタミンB含量に就きて. 農学研究 20.

———. 1933. 一日中に於ける玄米の水分含量, 重量及び大きさの変化. 農学研究 20.

———. 1934—'36. 米の形質とビタミンB含量との關係, I—III. 農学研究 22—26.

中 沢 敏. 1934—'38. 小麦の品質に関する研究, I—IV. 農学研究 23—30.

岡村 保. 1934. 胴割米歩合と搗精碎米歩合との關係. 農学研究 22.

———. 1934. 米の釜殖歩合に就きて. 農学研究 23.

———. 1935. 青米に就きての研究 (続報). 農学研究 25.

———. 1935—'36. 胴切米に就きて, I—II. 農学研究 25—26.

———. 1937. 胴割米に関する研究. 農学研究 27.

- 近藤万太郎, 高橋隆平, 寺坂侑視. 1937—'39. 大麦, 小麦, 大豆, 蕁藁等農産
種実の等級検査に就きて, I—II. 農学研究 27—31.
- 岡村保. 1938. 米の食味に就いて. 農学研究 29.
- . 1938. 胚芽米の搗精に関する研究 (予報). 農学研究 30.
- . 1940. 米穀の品質に関する研究. 特別報告 5.
- 本庄益雄. 1941—'42. 小麦の検査等級と品質との関係, I—II. 農学研究 32—33.
- . 1941. 2カ年間貯蔵したる小麦粉の品質に就いて. 農学研究 32.
- 近藤万太郎, 寺坂侑視, 海野元太郎. 1941—'42. 旱害米の品質につきての研究,
I—II. 農学研究 32—33.
- , (寺坂侑視, 海野元太郎). 1941—'42. 冬期に於ける米の日照乾燥とそ
の効率, I—II. 農学研究 32—33.
- 本庄益雄. 1942. 小麦の品質に関する統計的研究. 農学研究 33.
- 近藤万太郎, 海野元太郎. 1942. 籾米に関する研究, I. 農学研究 34.
- 岡彦一. 1942. 紫外線による穀物の螢光の研究, I—III. 農学研究 33.
- 近藤万太郎, 海野元太郎, 渡辺行弘. 1943. 冷害米の品質に関する研究. 農学研
究 35.
- , ———, ———. 1943. 浸水腐敗米に関する研究. 農学研
究 35.
- 岡彦一. 1943. チオクローム法による玄米のビタミン B₁ の定量. 農学研
究 35.
- 近藤万太郎, 海野元太郎. 1944. 小麦の性状と検査等級との関係に就いて. 農学研
究 36.
- , ———. 1944. 米の食味試験, I. 農学研究 36.
- 貝原弘道, (山本二郎). 1949—'51. 小麦の品質に関する研究, I—III. 農学研
究 38—39.
- Kondō, M. 1916. Untersuchungen über das Volumgewicht des enthülsten

Reiskornes. Ber. Ōhara Inst. 1.

Kondō, M. 1917. Untersuchung über die Dicke der Reiskleieschicht. Ber. Ōhara Inst. 1.

—————, (Okamura T., Terasaka, Y., Uno, M.). 1927—'43. Untersuchungen der verschiedenen Reiskörner geringerer Qualität, I—VI. Ber. Ōhara Inst. 3—9.

—————, Okamura, T. 1929—'30. Vergleichende Untersuchungen der physikalischen Eigenschaften des enthülsten (Genmai) und des bespelzten Reiskornes (Momimai), I—IV. Ber. Ōhara Inst. 4.

—————, (Takahashi, R., Terasaka, Y.). 1936—'41. Untersuchung und Bewertung von Gersten, Weizen, Sojabohnen und Rapssamen, I—II. Ber. Ōhara Inst. 7—8.

Oka, H. 1942. Studies on the fluorescence of cereal grains. Ber. Ōhara Inst. 9.

iv. 育 種 遺 伝

山口 弥 輔. 1920. 遺伝の実験的研究に就いて. 農学講演集 2.

近藤万太郎. 1922. 作物育種汎論. 農学講演集 4.

山口 弥 輔. 1926. 実験遺伝学より見たる稲の形質. 農学研究 9.

大原農業研究所種芸部. 1927. 藁の育種方法に就きての実験. 農業研究 11.

—————, 1927. 水稻の芒の遺伝実験. 農学研究 11.

岡 村 保, 久 宗 壯. 1927. 大麻の雌雄と種子との関係に就きて. 農学研究 10.

藤 本 隅 太. 1927. 水稻の新種育成特に吉神種に就きて. 農学研究 10.

—————, 1927. 畸型稲の一例曲玉稲及び類似稲につきて. 農学研究 11.

近藤万太郎, 藤 本 隅 太. 1927. 不稔稲のベヂグリー栽培の結果に就きて. 農学研究 10.

山口 弥 輔. 1929. 稲の S—M 「リンケージ」 群に関する知見補遺. 農学研究 13.

久 宗 壯. 1930. 不稔稲の連続越年株に連年現わるる不稔粒歩合並びに次世代の不稔稲歩合に就きて. 農学研究 15.

- 久宗 壯. 1930. 縞稲の連続越年株より現わるる白苗, 縞稲及び緑稲の歩合に就きて. 農学研究 15.
- 近藤万太郎, 一色重夫. 1933—'35. 水稻品種の圃場収量試験に就きての考察, I—IV. 農学研究 21—25.
- , 笠原安夫. 1933. 不稔稲系統に出現せし枯死淡黄苗に就きて. 農学研究 21.
- , 一色重夫. 1933. 畸形稲2種の出現並びに其の遺伝に就きて. 農学研究 20.
- , ————. 1933. 体菜の育種に於ける変化物の出現及び其の遺伝に就きて. 農学研究 20.
- , 笠原安夫. 1933. メロン畸形幼植物発生例及び其の原因につきての実験的研究. 農学研究 20.
- 笠原安夫. 1934. 縞稲の越年株より連年出現する白苗, 縞稲及び緑稲の歩合に就きて. 農学研究 23.
- . 1934. 不稔稲の連続越年株に連続現わるる不稔粒歩合並びに次世代の分離に就きて. 農学研究 23.
- 近藤万太郎, 一色重夫. 1934. 採種地を異にせる粃種子の生産力試験. 農学研究 23.
- 笠原安夫. 1942. 諸種子の畸形籾花及び畸形玄米を部分的に出現する稲2種に就きて. 農学研究 34.
- 高橋隆平. 1942—'47. 大麦幼植物の特性に関する研究, I—II. 農学研究 34—37.
- , (山本二郎, 板野弥寿夫, 丸橋渡). 1942—'51. 本邦大麦品種の分類と地理的分布に関する研究, I—XV. 農学研究 34—39.
- . 1944. 大麦の底刺の変異と底刺の構造に関する一私見. 農学研究 36.
- . 1947. 日本産大麦の芒質と芒の灰分含量との関係(予報). 農学研究 37.
- , 山本二郎. 1951. 大麦に於ける澱性及び稈の脆弱性の遺伝及び連鎖. 農学研究 39.
- , ————. 1951. 麦類の出穂生理とその遺伝, I. 農学研究 40.

- Kondō, M., Fujimoto, S. 1927. Spontane Entstehung einer missgestalteten Reispflanze "Magatamaine". Ber. Ōhara Inst. 3.
- Yamaguchi, Y. 1926—'31. Kreuzungsuntersuchungen an Reispflanzen, I—II. Ber. Ōhara Inst. 3—5.
- Kondō, M. 1927. Über die Ergebnisse der Pedigree-Zucht der semisterilen Reispflanzen. Ber. Ōhara Inst. 3.
- , Takeda, M., Fujimoto, S. 1927. Untersuchungen über die Weissgestreifte Reispflanze (Shimaine). Ber. Ōhara Inst. 3.
- , Isshiki, S. 1933. Spontane Entstehung von zwei missgestalteten Reispflanzen und ihre Vererbungsverhältnisse. Ber. Ōhara Inst. 6.
- , Kasahara, Y. 1933. Vorkommen anormaler Keimlinge in den Melonen-Samen. Ber. Ōhara Inst. 6.
- , Isshiki, S. 1935. Vorkommen von abnormen Reiskörnern, die entweder keimlos sind oder zwei Keime besitzen. Ber. Ōhara Inst. 6.
- , 1936. Untersuchungen über harte Samen von *Astragalus sinicus*, die in 17 bzw. 18 Jahr lang unter Wasser nicht gequollen hatten, besonders über die Vererbungsverhältnisse dieser Hart-schaligkeit. Ber. Ōhara Inst. 7.
- Takahashi, R. 1942—'51. Studies on the classification and the geographical distribution of the Japanese barley varieties, I—III. Ber. Ōhara Inst. 9.

v. 作物学, 栽培法

- 近藤万太郎. 1924. 稲に就きての研究. 農学研究 6.
- 岡村 保. 1926. 苗代の施肥量に就いて. 農学研究 9.
- 近藤万太郎. 1926. 熱帯の作物. 農学研究 9.
- , 岡村 保. 1930—'33. 水温と稲の生育との関係, I—VI. 農学研究

15—21.

近藤万太郎. 1931. 稲及び米に就きて. 農学研究 17.

笠原安夫. 1932. 昭和6年新潟県中蒲原郡内に於ける早稲山崎糯気象関係による不稔現象に就きての考察. 農学研究 19.

近藤万太郎, (岡村保, 一色重夫, 笠原安夫, 寺坂侑祝, 海野元太郎). 1932—'42.

稲のフォトペリオヂズムに関する実験的研究, I—IV. 農学研究 18—34.

————, 笠原安夫. 1934. 採種に関する実験的研究, I—II. 農学研究 22.

————, —————. 1934. 粟, 黍, 稷及び近縁植物の穎の灰像の比較研究. 農学研究 23.

一色重夫, 笠原安夫. 1934. 豌豆, 蚕豆のフォトペリオヂズムに関する実験的研究. 農学研究 24.

笠原安夫, 一色重夫. 1934. 藎のフォトペリオヂズムに関する実験的研究, I. 農学研究 24.

一色重夫, 笠原安夫, 寺坂侑祝. 1936. 紫雲英のフォトペリオヂズムに関する実験的研究. 農学研究 26.

————, 寺坂侑祝. 1936. 蚕豆のフォトペリオヂズムに関する実験的研究 (追報). 農学研究 26.

————, —————. 1936. 藎のフォトペリオヂズムに関する実験的研究, II. 農学研究 26.

岡村保, 一色重夫, 笠原安夫. 1936. 麦のフォトペリオヂズムに関する実験的研究. 農学研究 26.

一色重夫. 1936. 穀粒計数盤の使用と千粒重量の測定とに就きて. 農学研究 26.

近藤万太郎, (一色重夫, 寺坂侑祝, 高橋隆平, 笠原安夫). 1936—'43. 小麦の穂発芽現象に就きて, I—IV. 農学研究 26—35.

————, (高橋隆平, 寺坂侑祝). 1938—'42. 稲の短期栽培としての晩化法, I—IV. 農学研究 29—33.

————, —————, —————. 1938. 稲田の落水期と米穀の収量並びに品質との関係に就きて, I. 農学研究 30.

- 近藤万太郎, 高橋隆平, 寺坂 侑 祝. 1938. 小麦のヤロビゼーションに関する試験. 農学研究 30.
- , 笠原安夫. 1942—'43. 薬剤による雑草の駆除試験, I—VIII. 農学研究 33—35.
- , 寺坂 侑 祝. 1942. 旱害対策試験, I. 農学研究 33.
- 笠原安夫. 1944—'47. 薬剤による雑草の駆除試験, IX—XII. 農学研究 36—37.
- . 1944. 30年間水田雑草種子の埋土とその発芽. 農学研究 36.
- . 1947—'51. 本邦雑草の種類及び地理的分布の研究, I—IV. 農学研究 37—39.
- . 1948. 水田雑草の防除試験, I—II. 農学研究 37—38.
- 板野弥寿夫. 1948. 大麦品種の稈歩合に就きて. 農学研究 37.
- 笠原安夫. 1949—'51. 2.4-D に依る耕地雑草の防除試験, I—V. 農学研究 38—40.
- . 1950. 耕地雑草の発生に関する実験的研究, I. 農学研究 39.
- 定 金 章. 1951. 水稻の耐旱に関する研究 (予報). 農学研究 39.
- 笠原安夫. 1951. I P C に依る畑地雑草防除の基礎的研究, I. 農学研究 40.
- Yamaguchi, Y. 1919. Über die Beziehung der Aufblühzeit und des Sitzes der Blüte am Rispenaste zum Korngewichte des Reises. Ber. Ōhara Inst. 1.
- Kondō, M. 1923. Beiträge zur Kenntnis der Keimungsphysiologie der Reissaatkörner (*Oryza sativa*), des Wachstums ihrer Keimpflanzen und der Beschaffenheit des Reissaatbeetes (Nawashiro). Ber. Ōhara Inst. 2.
- , Okamura, T. 1930—'34. Beziehung zwischen der Wassertemperatur und dem Wachstum der Reispflanzen, I—VI. Ber. Ōhara Inst. 4—6.
- , —————. Isshiki, S., Kasahara, Y. 1932—'34. Untersuchungen über "Photoperiodismus" der Reispflanzen, I—II. Ber. Ōhara Inst.

5—6.

- Kondō, M., Takahashi, R., Terasaka, Y. 1938. Die Jarowisation des Weizens. speziell in Bezug auf den praktischen Wert des Verfahrens in den klimatischen Verhältnissen Südjakans. Ber. Ōhara Inst. 8.
- Kasahara, Y. 1951. Some tests on the use of 2,4-dichlorophenoxyacetic acid for controlling weeds in paddy fields, I—II. Ber. Ōhara Inst. 9.
- , Akita, S. 1951. The abnormality in the germination of squash, *Cucurbita moschata* Duch., caused by light. Ber. Ōhara Inst. 9.

vi. 雑

- 三宅千秋. 1922. 圃場試験の實際的誤差並びに諸種坪刈法の比較. 農学講演集 4.
- 近藤万太郎. 1925. 第2回太平洋学術會議農学部会の状況報告. 農学研究 7.
- 一色重夫. 1936. 諸種糧食作物が段当生産物にて人を養う力及び適否の比較. 農学研究 17.
- 近藤万太郎. 1941. 岡山県下小型石油発動機普及事情. 農学研究 32.
- Miyake, C. 1916. The experimental error in field trials and the effect on the error of various method of sampling. Ber. Ōhara Inst. 1.

2. 農芸化学部業績

i. 土 壤 肥 料

- 大杉 繁. 1920. 土壤の肥瘠. 農学講演集 2.
- . 1920. 土壤無機酸性に関する研究. 特別報告 1.
- 小野寺伊勢之助. 1920. 紫雲英の稲作に及ぼす影響及び其の有害作用の原因に就いて. 農学講演集 2.
- 荒川左千代. 1926. 土壤の炭素率 carbon-nitrogen ratio に及ぼす微生物の影響に就いて. 農学研究 9.
- 板野新夫. 1927. 施肥の微生物学的研究. 農学研究 10.

- 板野新夫, 荒川左千代. 1927—'32. 水田に関する土壤微生物学的研究, I—IV.
農学研究 10—18.
- 荒川左千代. 1927. 板野式新堆肥製造試験報告. 農学研究 11.
- 松浦章. 1928. 板野式新堆肥の肥効に就いて. 農学研究 12.
- 板野新夫, 松浦章. 1929. 干拓地の土地改良に及ぼす硫黄の効果に就いて.
農学研究 13.
- , 荒川左千代. 1930. 水田土壤に対してウイノグラッキ氏アゾトバク
ター試験の応用(予報). 農学研究 15.
- , —————. 1931. 本邦耕土の水素イオン濃度に就きて. 農学研究 17.
- , —————, 松浦章. 1931. 耕土の酸度に就きて. 農学研究 17.
- , 松浦章. 1932. 紫雲英の生育と土壤反応との関係に就きて. 農学
研究 18.
- , —————. 1932. 土壤溶液に関する研究. 農学研究 19.
- , —————. 1933. 食塩の植生並びに肥料分解に及ぼす影響に就いて,
I—II. 農学研究 20.
- 細田克巳. 1933. 本邦に於ける所謂黒土の組成並びに不良原因に就いて, I—III.
農学研究 21.
- 板野新夫. 1934. 自給肥料と塵芥の肥料化. 農学研究 23.
- , 松浦章. 1934. 販売無機質肥料の物理的性質に就きて. 農学研
究 23.
- , 辻康彦. 1934—'35. 本邦土壤の沃素含量に就いて, I—II. 農学
研究 24—25.
- , (————). 1937. 土壤の天然的研究, I—II. 農学研究 27—28.
- , —————. 1938. 鉄化合物の肥料分解に及ぼす影響に就いて. 農学
研究 29.
- 川口桂三郎, 山本快二. 1942. 水田に施用せる硫酸アムモニアの還元依る障害
並びにその対策に就いて. 農学研究 33.
- , —————. 1942—'43. 畑地状態土壤と水田状態土壤との連繫的研

- 究, I—IV. 農学研究 34—35.
- 川口桂三郎. 1944. 畑地状態土壤並びに水田状態土壤中に於ける 磷酸塩の動静に就いて, I—II. 農学研究 36.
- . 1944. 水田状態土壤中に於ける 硫酸アムモニアの水稲幼植物並びに籾発芽に対する有害作用に就いて. 農学研究 36.
- Ōsugi, S., Uetsuki, T. 1916. Über die Azidität des Sauer-Mineralbodens, I. Ber. Ōhara Inst. 1.
- . 1920. Inversion of cane sugar by mineral-acid-soil. Ber. Ōhara Inst. 1.
- Onodera, I. 1920—'23. Über die Gase, welche im Reisfelde bei der Zersetzung von Genge (*Astragalus sinicus*) entstehen, I—III. Ber. Ōhara Inst. 1—2.
- Ōsugi, S., Soyama, N. 1921. On the change of soil-reaction by manuring, I. Ber. Ōhara Inst. 2.
- . 1922. On the catalytic action of soils. Ber. Ōhara Inst. 2.
- Itano, A., Arakawa, S. 1927—'31. Studies on the soils in ricefield, I—IV. Ber. Ōhara Inst. 3—5.
- , ———. 1928. Some scientific consideration on the Itano process of composting, I. Ber. Ōhara Inst. 3.
- , ———. 1930. Investigation on Winogradsky's Azotobacter test as to its applicability to some rice-field soils in Japan. Ber. Ōhara Inst. 4.
- , Matsuura, A. 1931. Influence of sulfur on the nature of soils, I. Ber. Ōhara Inst. 5.
- , ———. 1932. Studies on soil reaction and the growth of *Astragalus sinicus* (Genge). Ber. Ōhara Inst. 5.
- , Tuzi, Y. 1934—'35. Investigation on the iodine contents in the soils in Japan, I—II. Ber. Ōhara Inst. 6—7.

Itano, A., 1936. Spontaneous studies of soils, I—II. Ber. Ōhara Inst. 7.

Hosoda, K. 1936. The black soils in Japan, I. Ber Ōhara Inst. 7.

ii. 醱酵および微生物

宗定哲二, 1924. 酵素の化学的性状に就いて. 農学研究 6.

板野新夫, 1926. 土壤微生物の概要. 農学研究 9.

荒川左千代, 1928. 土壤細菌研究法の概要. 農学研究 12.

板野新夫, 荒川左千代, 1929. アムモニア化成作用硝酸化作用並びに硝酸還元作用に及ぼす炭素質有機物の影響に就きて. 農学研究 13.

—————, (松浦章, 辻康彦). 1930—'38. 荳科植物の根瘤菌に就いて, I—VI. 農学研究 14—29.

—————, 1930. *Azotobacter* の生理学的研究に就いて. 農学研究 15.

—————, 荒川左千代, 1930. 細菌 *catalase* に関する研究. 農学研究 15.

—————, —————. 1930. 耐熱性繊維醱酵菌 *Bacillus thermofibrincolus* n. sp. に就いて. 農学研究 16.

—————, 1931. 輓近に於ける土壤微生物学研究の趨勢. 農学研究 17.

—————, 荒川左千代, 1932—'33. 土壤中に於ける繊維素分解に関する研究, I—VI. 農学研究 18—21.

—————, —————. 1932. 嫌気性窒素固定菌に関する 2, 3 の実験. 農学研究 19.

—————, —————. 1932. アゾトバクターに由る硝酸塩の還元. 農学研究 19.

—————, —————. 1932—'33. 有機質肥料に関する微生物学的研究, I—III. 農学研究 19—20.

—————, —————. 1933. 新好気性繊維素分解菌 *Cellvibrio calida* n. sp. に関する研究. 農学研究 20.

—————, 松浦章, 1934. 沃度と微生物の物理的並びに肥料分解との関係. 農学研究 22.

—————, —————. 1934—'36. *Azotobacter* の生理的作用に及ぼす紫外線の

- 研究, I—III. 農学研究 23—26.
- 板野新夫. 1934. Aerial-earth circuit の生物に及ぼす影響に就いて. 農学研究 24.
- , 松浦章. 1936. 耕土, 稲藁, 粃の耐熱性菌類特に纖維素分解に関する研究, I—II. 農学研究 26.
- , 辻康彦. 1937—'38. 茶の微生物に就いて, I—VI. 農学研究 27—29.
- , ————. 1938. 満洲大豆根瘤菌に関する研究. 農学研究 29.
- 小沢潤二郎, (武田晃, 林修一, 宇佐見四郎, 倉地守, 三宅博). 1947—'51. ペクチン酸酵に就いて, I—XI. 農学研究 37—39.
- Itano, A. 1926. Soil microorganisms and activators. Ber. Ōhara Inst. 3.
- . 1926. Studies on the cellulose. Ber. Ōhara Inst. 3.
- , Arakawa, S. 1928. Studies on bacterial catalase. Ber. Ōhara Inst. 3.
- , ————. 1929. Microbiological investigation on the virgin and arable volcanic soils from Sakura-jima, Japan. Ber. Ōhara Inst. 4.
- , ————. 1929—'30. Studies on *Bacillus thermofibrincolus* n. sp., I—III. Ber. Ōhara Inst. 4.
- , ————. 1932. Nitrate reduction by *Azotobacter*. Ber. Ōhara Inst. 5.
- , ————. 1932. Investigation of cellulose decomposition in soils, I. Ber. Ōhara Inst. 5.
- , ————. 1932. A modified Morse-Kopeloff's anaerobic culture method. Ber. Ōhara Inst. 5.
- , ————. 1932. Microrbiological investigation of organic manures, I. Ber. Ōhara Inst. 5.
- , Matsuura, A. 1933. Influence of iodine on physiological activities

- of microorganisms. Ber. Ōhara Inst. 6.
- Itano, A. 1933—'34. Investigation on the influence of aerial-earth circuit on the biological activities, I—III. Ber. Ōhara Inst. 6.
- , Matsuura, A. 1934—'36. Investigation on the influence of ultraviolet rays on the physiological activities of *Azotobacter*, I—III. Ber. Ōhara Inst. 6—7.
- , ————. 1934—'38. Studies on the nodule bacteria of *Astragalus sinicus* (Genge), I—XII. Ber. Ōhara Inst. 6—8.
- , ————. 1936. Studies on thermophilic bacteria with special reference to cellulose decomposition, I. Ber. Ōhara Inst. 7.
- , Tsuji, Y. 1936—'37. Microbiological studies on tea, I—II. Ber. Ōhara Inst. 7.
- Ozawa, J. 1951. Studies on the pectic enzymes, I. Ber. Ōhara Inst. 9.

iii. 分析化学

- 板野新夫. 1930. アンチモン電極を用いる水素イオン濃度測定法に就いて, I—II. 農学研究 14—15.
- , (荒川左千代, 松浦章, 辻康彦). 1930—'37. Quinhydrone 電極法による土壤の水素イオン濃度測定法, I—IV. 農学研究 15—27.
- , 松浦章. 1932. 土壤水分の迅速測定法に就いて. 農学研究 18.
- . 1932. 塩素の電氣的定量法. 農学研究 19.
- , 松浦章. 1932. 土壤中に於ける塩素の定量. 農学研究 19.
- , 辻康彦. 1933. アンチモン電極法によるマグネシウムの電氣的定量法に就いて. 農学研究 21.
- , 松浦章. 1933. 酸性土壤の緩衝能測定と緩衝率に就いて. 農学研究 21.
- . 1938. キンヒドロン法に依る携帯用微量 pH 測定電極に就いて. 農学研究 29.

- 板野新夫, 辻 康彦, 長谷川 武, 守屋 正. 1938. 沃度の一新微量分析法に就いて. 農学研究 29.
- , 長谷川 武. 1938. 簡易土壤成分検定法の研究, I—II. 農学研究 29—30.
- 小林 純. 1947. 灌漑水の化学, I—II. 農学研究 37.
- . 1948—'51. 本邦河川の化学的研究, I—II. 農学研究 38—39.
- Onodera, I. 1917. Eine Methode zur Isolierung der Ameisen-, Essig- und Milchsäure. Ber. Ōhara Inst. 1.
- Yamamoto, R. 1918. On the insecticidal principle of *Chrysanthemum cinerariifolium* Bocc. (Insect powder), I. Ber. Ōhara Inst. 1.
- Munesada, T. 1924. On the chemical constituents of *Matteuccia orientalis* (Hk.) Trev. Ber. Ōhara Inst. 2.
- Itano, A., (Hosoda, K., Arakawa, S.). 1926—'29. Investigation on the Biilmann's quinhydrone electrode, I—IV. Ber. Ōhara Inst. 3—4.
- . 1929. A portable pH apparatus with micro-analytical electrode and saturated calomel electrode. Ber. Ōhara Inst. 4.
- . 1929. Tables of pH values corresponding to electromotive forces determined in hydro-quinhydrone, quinhydrone, hydrogen, and antimony electrode against N/10 and saturated KCl calomel and quinhydrone standard electrode. Ber. Ōhara Inst. 4.
- , Arakawa, S. 1929—'30. Investigation on antimony electrode for determination of hydrogen ion concentration, I—II. Ber. Ōhara Inst. 4.
- . 1930. An improved, portable pH apparatus. Ber. Ōhara Inst. 4.
- , Matsuura, A. 1931. Investigation on the electrometric method for determination of the chloride, I—II. Ber. Ōhara Inst. 5.
- . 1933. A quantitative method for determination of iodine. Ber. Ōhara Inst. 6.

- tano, A., Tsuji, Y. 1934. Electrometrical determination of magnesium by the use of antimony electrode. Ber. Ōhara Inst. 6.
- , ———. 1935—'38. Direct pH determination of soil under its natural state by quinhydrone method, I—III. Ber. Ōhara Inst. 6—8.
- , ———. 1936. Investigation on tea as to its iodine contents. Ber. Ōhara Inst. 7.
- , ———. Hasegawa, T., Moriya, T. 1938. A new microanalytical method for iodine. Ber. Ōhara Inst. 8.
- . 1938. A new micro-portable quinhydrone electrode. Ber. Ōhara Inst. 8.
- Kobayasi, J. 1951. Chemical investigation on the water of rivers in Japan. I. Ber. Ōhara Inst. 9.

iv. そ の 他

- 大杉 繁. 1918. 動植物栄養上に於ける石灰問題. 農学講演集 1.
- . 1922. 膠質化学大意. 農学講演集 3.
- . 1923. 空中窒素の利用問題. 農学講演集 5.
- 宗定 哲二. 1923. 植物体内に存在する配糖体について. 農学講演集 5.
- 板野 新夫. 1928. 第1回万国土壤学会議に就いて. 農学研究 12.
- . 1928. 下水の処理と其の利用法に就いて. 農学研究 12.
- , 松浦 章. 1932. 塩素酸加里使用に依る除草法に就いて. 農学研究 18.
- , 辻 康彦. 1934—'38. 寒天に就いて, I—IV. 農学研究 22—30.
- , ———. 1936. 茶中に含有される沃素に就いて. 農学研究 26.
- , ———, 長谷川 武, 守屋 正. 1938. 米糠及び小麦中の沃度含量に及ぼす海水の影響に就いて. 農学研究 29.
- 小林 純. 1947. 鉛毒の原因と其の防除. 農学研究 37.

- Onodera, I. 1916. Untersuchungen über die Beschädigung der Pflanzen durch Säure und über die Reizwirkungen der Säure auf Pflanzen. Ber. Ōhara Inst. 1.
- Munesada, T. 1922. Über den Farbstoff der Frucht von *Gardenia florida* L. (Gelbschote). Ber. Ōhara Inst. 2.
- Itano, A. 1933—'38. Reports on general survey and investigation on agar, I—IV. Ber. Ōhara Inst. 6—8.
- , Tsuji, Y., Hasegawa, T., Moriya, T. 1938. Influence of sea-water on the iodine contents of rice, rice-bran and wheat. Ber. Ōhara Inst. 8.

3. 植物病理部業績

i. 一般分類

- 笠井幹夫. 1922. 植物の病害抵抗性に就きて. 農学講演集 3.
- 西門義一. 1923. 植物病原菌の寄主体侵害法. 農学講演集 5.
- 笠井幹夫. 1924—'26. 視外生物に因る植物の疾病, I—II. 農学研究 6—8.
- 西門義一. 1925. 禾穀類の「ヘルミントスポリウム」病に就きて. 農学研究 7.
- 西門義一, 三宅忠一. 1926. 玉蜀黍の「ヘルミントスポリウム」病に関する研究. 農学研究 8.
- . 1926. 水素イオン濃度の測定法と其の植物病害研究上の応用. 農学研究 9.
- . 1928. 日本産禾本科植物の「ヘルミントスポリウム」病に関する研究. 特別報告 4.
- . 1932. 菌類胞子の顕微鏡写真及び描画の簡便なる一新法. 農学研究 19.
- . 1932. シュナレン・ヴィルテルを有する菌糸細胞の核行為に関する研究, I. 農学研究 19.
- . 平田幸治. 1937. 数種の植物病原菌の菌核の生存期間と環境 特に温度及び水分との関係. 農学研究 28.

- 西門義一, 平田幸治, 樋口達雄. 1938. 各種植物病原菌類培養の生存期間と温度との関係. 農学研究 29.
- . 1941. 植物病原菌の性に就いて. 農学研究 32.
- 升本修三. 1947. 土壤放射状菌の生理 2, 3に就きて. 農学研究 37.
- 西門義一. 1948. 主要農作物病害の見分け方, I—II. 農学研究 37.
- Kasai, M. 1924. Investigations on the Nelson's bodies as observed in the leaf-roll, mosaic, and healthy plants. Ber. Ōhara Inst. 2.
- Nisikado, Y., Miyake, C. 1924. Morphological and physiological studies on a new *Helminthosporium* found on *Leptochloa chinensis* Nees. Ber. Ōhara Inst. 2.
- Kasai, M. 1925. *Fusarium Aspidioli* Sawada, its culture and morphology. Ber. Ōhara Inst. 2.
- Nisikado, Y., Miyake, C. 1925. Über ein neues *Helminthosporium* auf *Panicum Crus-Galli* L. Ber. Ōhara Inst. 2.
- , ———. 1926. Studies on two *Helminthosporium* diseases of maize, caused by *Helminthosporium turcicum* Passerini and *Ophiobolus heterostrophus* Drechsler (*Helm. Maydis* Nisikado et Miyake). Ber. Ōhara Inst. 3.
- . 1927. Temperature relations to the growth of Graminicolous species of *Helminthosporium*, I. Ber. Ōhara Inst. 3.
- . 1929. Studies on the *Helminthosporium* diseases of Gramineae in Japan. Ber. Ōhara Inst. 4.
- . 1930. Über die Bildung von konzentrischen Zonen einiger *Helminthosporium*-Arten in Reinkulturen. Ber. Ōhara Inst. 4.
- . 1930. Vorläufige Mitteilung über das zytologische Verhalten von Myzelzellen mit Schnallenwirteln. Ber. Ōhara Inst. 4.
- . 1933. A simple device for drawing and photomicrographing small living spores of fungi. Ber. Ōhara Inst. 5.

Nisikado, Y., Hirata, K. 1937. Studies on the longevity of sclerotia of certain fungi, under controlled environmental factors. Ber. Ōhara Inst. 7.

—————, —————, Higuti, T. 1938. Studies on the temperature relations to the longevity of pure culture of various fungi, pathogenic to plants. Ber. Ōhara Inst. 8.

—————. 1941. On the heterothallism of phytopathogenic fungi. Ber. Ōhara Inst. 8.

ii. 薬劑, 防除方法

西門義一, 三宅忠一. 1927. 穀類の葉枯病に対する種子消毒剤としての「ウスブルン」に関する研究. 農学研究 11.

笠井幹夫. 1930. 木材防腐剤に関する私見. 農学研究 14.

西門義一, (中山隆夫, 宮脇雪夫, 大島俊一, 日浦運治). 1943—'50. 病害予防用薬剤の効果の研究, I—VII. 農学研究 35—39.

—————, 中山隆夫. 1948. 麦種子温湯処理の農閑期に於ける実施. 農学研究 37.

—————, (大島俊一, 石井博, 森田日出男). 1949—'51. 拮抗微生物利用による作物病害防除の研究, I—V. 農学研究 38—40.

Nisikado, Y., Nakayama, T., Miyawaki, Y. 1951. Studies on the methods for testing the effectiveness of fungicides, I—II. Ber. Ōhara Inst. 9.

iii. 食用菌類

西門義一, 山内己酉. 1935. シヒタケの性とその鋸屑培養に就いて. 農学研究 25.

—————, —————. 1935. マツタケ胞子の発芽とその菌糸の純粋培養に就いて. 農学研究 25.

- 西門義一, 樋口達雄. 1937. シヒタケ菌糸の四極性に関する研究補遺. 農学研究 28.
- , ————. 1938. 2, 3 重要食用菌類の純粋培養菌糸の生存期間と温度との関係. 農学研究 29.
- , 木村 勘二. 1939. シメヂの人工増殖に関する基礎的研究, I. 農学研究 31.
- . 1939. 培養種菌による改良椎茸栽培法. 農学研究 31.
- , 木村 勘二, 宮脇雪夫. 1941. 純粋培養に於けるシヒタケ菌糸の生育と樹種との関係, I. 農学研究 32.
- , ————, ————. 1941. マツタケ人工増殖に関する基礎的研究, II. 農学研究 32.
- , 宮脇雪夫. 1942. 椎茸の子実体形成と温度並びに光線との関係に就いて (予報). 農学研究 33.
- , ————. 1942. 椎茸楯木を侵害する 2, 3 主要害菌の防除に就いて. 農学研究 33.
- , 三橋 健, 中山隆夫. 1942—'44. 椎茸楯木の害菌図説, I—II. 農学研究 34—36.
- , 宮脇雪夫. 1943. ヒラタケの簡易人工培養法 (概要). 農学研究 35.
- . 1950. 原木に於けるシヒタケ菌糸の生育と環境との関係. 農学研究 39.
- Nisikado, Y., Yamauti, K. 1935. Studies on the heterothallism of *Cortinellus Berkeleyana* Ito et Imai, an economically important edible mushroom in Japan. Ber. Ōhara Inst. 7.
- , ————. 1936. On the spore-germination and the pure-culture of *Armillaria Matsutake* Ito et Imai, the most important edible mushroom in Japan. Ber. Ōhara Inst. 7.
- , Kimura, K., Miyawaki, Y. 1941. Studies on the principles of growing Japanese matsutake artificially, II. Ber. Ōhara Inst. 8.
- , ————. 1942. Principles of artificial propagation of *Tri-*

- choloma conglobatum* (Vitt.) Sacc., I. Ber. Ōhara Inst. 9.
- Nisikado, Y., Kimura, K., Miyawaki, Y. 1942. Studies on the effect of kinds of tree in culture medium upon the growth of *Cortinellus Berkeleyanus*, I. Ber. Ōhara Inst. 9.
- , Mihashi, T., Nakayama, T. 1942—'43. Illustrations and descriptions of fungi injurious to the culture of siitake mushroom, I—II. Ber. Ōhara Inst. 9.
- , Miyawaki, Y. 1943. On the relation of temperature and light to the development of sporophores in *Cortinellus Berkeleyanus*. Ber. Ōhara Inst. 9.

iv. 稲 の 病 害

- 西門義一. 1918. 稲熱病菌に就いて. 農学講演集 1.
- . 1920. 稲胡麻葉枯病予防法としての粃種の温湯浸漬. 農学講演集 2.
- , 三宅忠一. 1927. 太平洋沿岸諸国に於ける稲胡麻葉枯病菌の比較研究. 農学研究 10.
- , (松本弘義). 1932. 稲馬鹿苗病に関する研究, I—II. 農学研究 19.
- , 松本弘義, 山内己酉. 1933. フザリウム属菌の生理的分化に関する知見, I—II. 農学研究 20.
- , —————, —————. 1934. 日印両国産稲馬鹿苗病菌の比較研究. 農学研究 23.
- , —————. 1936. 稲熱病に対する稲の耐病罹病に関する考察. 農学研究 26.
- 木村 勘二. 1937. 変色粃と菌類との関係に就きて. 農学研究 28.
- 西門義一, 木村 勘二. 1939. 稲馬鹿苗病被害稲稈の病理解剖的知見, I. 農学研究 31.
- , 中山隆夫. 1942. 稲胡麻葉枯病の一次発生防止法としての粃種消毒. 農学研究 33.
- . 1942. 稲胡麻葉枯病防除に関する研究, II. 農学研究 34.

- 西門義一, 中山隆夫. 1943. 稻馬鹿苗病菌による徒長現象と土壤温度との関係. 農学研究 35.
- 中山隆夫. 1947. 稻条斑病菌の發育及び孢子発芽と温度との関係. 農学研究 37.
- 西門義一, 中山隆夫, 日浦運治. 1950. 稻の小粒菌核病菌 *Helminthosporium sigmoideum* Cavara の寄主体侵入時期に就いて. 農学研究 39.
- Nisikado, Y. 1917. Studies on the rice blast fungus, I. Ber. Ōhara Inst. 1.
- , Miyake, C. 1920. Treatment of the rice seeds for Helminthosporiose, I. Ber. Ōhara Inst. 1.
- , —————. 1922. Studies on the Helminthosporiose of rice-plant. Ber. Ōhara Inst. 2.
- Kasai, M. 1923. Cultural studies with *Gibberella Saubinetii* (Mont.) Sacc. which is parasitic on rice-plant. Ber. Ōhara Inst. 2.
- Nisikado, Y. 1927. Comparative studies on Helminthosporium diseases of rice in the Pacific regions. Ber. Ōhara Inst. 3.
- . 1933. Vergleichende Untersuchungen über die durch *Lisea Fujikuroi* Saw. und *Gibberella moniliformis* (Sh.) Wintel. verursachten Gramineenkrankheiten. Ber. Ōhara Inst. 5.
- , Matsumoto, H., Yamauti, K. 1933. Reports on the physiological specialization of Fusarium, I—II. Ber. Ōhara Inst. 6.
- , —————, —————. 1934. Comparative studies on two rice fungi: the foot-rot-fungus in India and the “Bakanae”-fungus in Japan. Ber. Ōhara Inst. 6.
- , Kimura, K. 1941. A contribution to pathological anatomy of rice plants affected by *Gibberella Fujikuroi* (Saw.) Wollenweber, I. Ber. Ōhara Inst. 8.
- , Nakayama, T. 1943. Notes on the pathological anatomy of rice grains affected by *Helminthosporium Oryzae*. Ber. Ōhara Inst. 9.

Nisikado, Y., Nakayama, T. 1943. The disinfection of rice seeds affected by *Helminthosporium Oryzae*, with special reference to the hot-water treatments. Ber. Ōhara Inst. 9.

v. 麦 の 病 害

西門義一, 松本弘義, 山内己酉. 1933. 小麦の条斑病に関する研究. 農学研究 21.

—————, —————, —————. 1934. 邦産穀類の赤黴病に関する研究, I. 農学研究 24.

—————, 平田幸治. 1938. 小麦赤黴病の一次発生防止法としての被害粒の比重選. 農学研究 29.

—————, 樋口達雄. 1938. 小麦条斑病菌と其の類似菌との比較研究. 農学研究 30.

—————, 平田幸治, 木村劫二. 1938. 麦類赤黴病菌の子嚢形成に就いて. 農学研究 30.

—————, 中山隆夫. 1944. 赤黴病菌病原性の変異状況. 農学研究 36.

—————, 山内己酉. 1949. 小麦苗に対する赤黴病菌 *Gibberella Saubinetii* Sacc. の侵入方法に就いて. 農学研究 38.

—————, 高橋隆平, 日浦運治. 1949. 大麦品種の耐病性に関する研究, I. 農学研究 38.

—————, 石井博. 1950. 小麦の赤黴病の病原性に及ぼす環境の影響, I. 農学研究 39.

Nisikado, Y. 1929. Preliminary notes on yellow spot disease of wheat caused by *Helminthosporium Tritici-vulgaris* Nisikado. Ber. Ōhara Inst. 4.

—————, Matsumoto, H., Yamauti, K. 1934. Studies on a new *Cephalosporium*, which causes the stripe disease of wheat. Ber. Ōhara Inst. 6.

—————, Hirata, K. 1938. On the specific gravity methods in grading

- the wheat seeds, as a control-means for the seedling blight, caused by *Gibberella Saubinetii* (Mont.) Sacc. Ber. Ōhara Inst. 8.
- Nisikado, Y, Higuti, T. 1938. Comparative studies on *Cephalosporium gramineum* Nisikado et Ikata, which causes the stripe disease of wheat, and *C. acremonium* Corda. Ber. Ōhara Inst. 8.
- , Takahashi, R., Hiura, U. 1951. Studies on the disease resistance in barley, I. Ber. Ōhara Inst. 9.

vi. その他の作物の病害

- 笠井幹夫. 1923. 胡瓜のモザイク病論. 農学講演集 5.
- . 1923. 藺草蛇紋病の病原. 農学講演集 5.
- . 1925. 馬鈴薯の葉捲病に就きての知見. 農学研究 7.
- . 1926. 蒟蒻薯の乾性腐敗病原に就いて. 農学研究 8.
- 松本弘義, 上村 稔. 1931. 西瓜の蔓割病に関する研究, I. 農学研究 17.
- 西門義一, 松本弘義. 1937. 慈姑の炎腫病に関する研究. 農学研究 28.
- , (宮脇雪夫, 木村胡二, 大島俊一). 1941—'47. 棉花の病害防除に関する研究, I—IV. 農学研究 32—37.
- , 宮脇雪夫. 1943. 豇豆の立枯を起す *Macrophomina phaseoli* 菌に就いて. 農学研究 35.
- , —————. 1944. クワキ及びハスの乾腐病菌に就いて. 農学研究 36.
- , 中山隆夫, 日浦運治. 1947. 甘藷の貯蔵腐敗防止に関する研究, I. 農学研究 37.
- , 日浦運治, 生田 豊. 1947. 甘藷黒星病防除に関する研究. 農学研究 37.
- , —————. 1950. チシャの新病害, 灰斑病. 農学研究 39.
- , —————. 1951. 貯蔵甘藷を侵害する *Macrophoma edulis* D'Almeida 菌について. 農学研究 39.
- Kasai, M. 1920. On the morphology and some cultural results of *Fusarium*

- Solani* (Mart.) Appel et Wollenweber, an organism which causes dry rot in the Irish potato tubers. Ber. Ōhara Inst. 1.
- Kasai, M. 1921. Observations and experiments on the leafroll disease of the Irish-potato in Japan. Ber. Ōhara Inst. 2.
- . 1922. Über den auf der Binse parasitische lebenden Pilze *Cercosporina juncicora* sp. n. Ber. Ōhara Inst. 2.
- Miyake, C. 1924. *Gibberella Saubinetii* (Mont.) Sacc. as a causal fungus of the wilt-disease of horse-bean. Ber. Ōhara Inst. 7.
- Kasai, M. 1924. *Fusarium Solani* (Mart. *pr. p.*) App. et Wr. as the causal agency of dry-rot in the "Konnyaku" corms. Ber. Ōhara Inst. 2.
- Nisikado, Y., Matsumoto, H. 1936. On the smut disease of *Sagittaria trifolia*. L. var. *sinensis* Makino caused by *Doassansiopsis Horiana* (P. Henn.). Ber. Ōhara Inst. 7.
- , Kimura, K., Miyawaki, Y. 1943. On two *Alternaria* species injurious to cotton fibers in bolls. Ber. Ōhara Inst. 9.

vii. 果樹，樹木の病害

- 西門義一，松本弘義. 1929. 楡の新病害. 黒斑病に関する研究予報. 農学研究 13.
- . 1933. 松樹材質の青変に就いての研究予報. 農学研究 21.
- , 山内己酉. 1934. 木材の青変に関する知見, I—III. 農学研究 22—24.
- , ————. 1937. ネムノキ苗立枯の一因としてのネオコスモスポラ, バシンフェクタ菌に就いて, I—III. 農学研究 27.
- , 木村 劭二. 1938. 桜樹の萎凋病に就いて. 農学研究 30.
- , 平田幸治, ————. 1939. 無花果の疫病に就いて. 農学研究 31.
- , 木村 劭二, 宮脇雪夫. 1939. マサキの褐紋病に就いて. 農学研究 31.

- 西門義一, (木村 勘二, 宮脇雪夫). 1939—'41. ポケの葉を侵害する褐斑病菌
他一菌に就いて, I—II. 農学研究 31—32.
- , —————. 1942. ギンモクセイの褐斑病に就いて. 農学研究 33.
- , —————. 1942. ヒメヤシヤブシの褐斑病菌に就いて. 農学研究 34.
- , —————. 1942. 槭樹萎凋病. 農学研究 34.
- , 木村 勘二, 宮脇雪夫. 1942. 槭樹の粗皮病. 農学研究 34.
- . 1944. ヒノキ, スギ及びアカマツの幼齡林を害するナラタケに就いて.
農学研究 36.
- , 1944. ヒノキ葉振り病に就いて. 農学研究 36.
- , 宮脇雪夫. 1944. ビャクシンの葉枯病. 農学研究 36.
- , 大島 俊一. 1944. ハナズハウの角斑病及び褐紋病. 農学研究 36.
- , 渡辺清志. 1951. クリの葉枯病に就いて. 農学研究 40.
- Nisikado, Y. 1923. Über die durch *Physalospora* und *Coniothyrium* verur-
sachten Krankheiten der Weintraube in Japan. Ber. Ōhara Inst. 2.
- , Matsumoto, H. 1929. A new disease of elm, caused by *Gno-*
monia Oharana n. sp. Ber. Ōhara Inst. 4.
- . 1931. Beiträge zur physiologischen Spezialisierung einiger
obstbewohnender Fusarien. Ber. Ōhara Inst. 5.
- , Yamauti, K. 1933—'35. Contributions to the knowledge of sap
stains of wood in Japan, I—III. Ber. Ōhara Inst. 5—6.
- , —————. 1937. On *Neocosmospora vasinfecta* Smith, a causal
fungus of seedling-wilt of silk-tree, *Albizzia Fulibrissin* Durraz.
Ber. Ōhara Inst. 7.
- , —————. 1937. Temperature relations to the vegetative and
reproductive growth and the pathogenicity of *Neocosmospora*
vasinfecta Smith. Ber. Ōhara Inst. 7.
- , Hirata, K., Kimura, K. 1941. On a *Phytophthora* rot of fig.
Ber. Ōhara Inst. 8.

4. 昆虫部業績

i. 果樹害虫

- 春川忠吉. 1918—'33. 梨姫心喰虫に就いて, I—VI. 農学講演集 1, 特別報告 3, 農学研究 12—21.
- . 1920. 桃の穿葉虫 (えかきむし). 農学講演集 2.
- , 近藤三郎. 1927. 梨姫心喰虫に対する硫酸ニコチンの効果. 農学研究 11.
- , 熊代三郎. 1930—'32. 梨皮潜虫の生活史につきて, I—II. 農学研究 16—19.
- Harukawa, C., (Yagi, N.). 1917—'23. Über die Lebensweise des Pfirsichtriebbohrers, *Laspeyresia molesta* Busck, I—II. Ber. Ōhara Inst. 1—2.
- , Yagi, N. 1918. On the life-history and habits of a peach leaf-miner, *Ornix* sp. Ber. Ōhara Inst. 1.
- , ———. 1918. The serpentine leaf-miner of the peach, a species of *Lyonetia*. Ber. Ōhara Inst. 1.
- . 1921. Studies on the peach saw-fly, *Eriocampoides matsumotonis* Matsumura. Ber. Ōhara Inst. 2.
- . 1921—'27. Studies on lime-sulphur-mixture, I—II. Ber. Ōhara Inst. 2—3.
- . 1924. Studies on the bionomics of the pear fruit sawfly, *Hopllocampa minuta* Christ. Ber. Ōhara Inst. 2.
- . 1929. Relation of temperature to the growth of the Oriental peach moth, I. Ber. Ōhara Inst. 4.
- , Kumashiro, S. 1930—'32. On the pear-bark miner, *Acrocercops astaurota* Meyrick, I—II. Ber. Ōhara Inst. 4—5.

ii. 稲 麦 作 害 虫

- 春川忠吉. 1930. 「はなひりのき」の毒力に就きて. 農学研究 15.
- . 1931—'32. ユリミミズ駆除剤としての「ハナヒリノキ」の効果に就きて, I—II. 農学研究 17—18.
- , (高戸竜一, 熊代三郎). 1931—'36. 二化螟虫の生態学的研究, I—VI. 農学研究 17—26.
- . 1932. ユリミミズに対する 2, 3 の薬剤の毒力に就きて. 農学研究 18.
- . 1933. ユリミミズ駆除剤としての生石灰. 農学研究 20.
- 熊代三郎. 1935. 蝗に関する 2, 3 の実験及び観察に就いて. 農学研究 25.
- 春川忠吉, 熊代三郎. 1936—'37. 稲の切蛆に就いて, I—III. 農学研究 26—28.
- 土屋 孝. 1939. 二化螟虫の蛹期の発育に及ぼす相互変温の影響. 農学研究 31.
- 深谷昌次, (金子武). 1947—'51. 二化螟虫の発生予察に関する基礎的研究, I—XIV. 農学研究 37—40.
- Harukawa, C. 1920—'26. Controlling the rice-borer (*Chilo simplex*) by submergence, I—II. Ber. Ōhara Inst. 1—3.
- , Takato, R., Kumashiro, S. 1931—'36. Studies on the rice-borer, *Chilo simplex* Butler, I—V. Ber. Ōhara Inst. 5—7.
- . 1932. On the toxic action of hanahiri-no-ki and its application for the control of yuri-mimizu. Ber. Ōhara Inst. 5.
- . 1932. The toxic action of certain chemicals on aquatic Oligochaetes. Ber. Ōhara Inst. 5.
- Fukaya, M. 1951. On the theoretical bases for predicting the occurrence of the rice stem borer in the first generation. Ber. Ōhara Inst. 9.
- . 1951. Physiological study on the larval diapause in the rice stem borer, *Chilo simplex* Butler. Ber. Ōhara Inst. 9.

iii. 蔬 菜 害 虫

- 春川忠吉, (近藤三郎, 高戸竜一, 熊代三郎). 1930—'39. 種蠅 (*Hylemyia cili-*

crura Rondani) に就いて, I—V. 農学研究 14—31.

熊代 三郎. 1930. 紋白蝶 *Pieris rapae* L. 冬期中の経過に就きて. 農学研究 15.

土屋 孝, 小阪和彦. 1943. 菜潜蠅 *Phytomyza atricornis* Meigen の生態,
I. 農学研究 35.

Harukawa, C., (Kumashiro, S., Takato, R.) 1930—'34. Studies on the seed-corn maggot, *Hylemyia cilicrura* Rondani, in Japan, I—IV. Ber. Ōhara Inst. 4—6.

iv. 貯 穀 害 虫

春川 忠吉. 1934. クロールピクリン燻蒸に関する 2, 3 の問題に就きて. 農学研究 22.

—————, (熊代三郎). 1934—'37. 麦蛾駆除法としての乾熱の効果, I—III. 農学研究 22—27.

—————, —————. 1935. クロールピクリン燻蒸法に就きて. 農学研究 24.

—————, —————. 1936—'38. 麦蛾に就いて, I—II. 農学研究 26—29.

土屋 孝, (小阪和彦). 1942—'44. 穀象の耐熱性に就いて, I—II. 農学研究 34—36.

—————, —————. 1943. 穀象の生態に関する研究, I. 農学研究 35.

深谷 昌次. 1947. コクゾウ及びコクゾウに及ぼす DDT の効果 (予報). 農学研究 37.

Harukawa, C., Kumashiro, S. 1934. Studies on fumigation with chloropicrin. Ber. Ōhara Inst. 6.

—————, (Kumashiro, S.). 1934—'41. Heat as a means of controlling the Angoumois grain-moth, I—III. Ber. Ōhara Inst. 6—8.

Tsuchiya, T., (Kosaka, K.). 1943. Experimental studies on the resistance of the rice weevil, *Calandra oryzae*, L., to heat, I—II. Ber. Ōhara Inst. 9.

v. 菌 害 虫

春川 忠吉, (近藤三郎, 熊代三郎). 1929—'30. 菌葉蜂の研究, III—IV. 農学研究

13—16.

- 春川忠吉, 熊代三郎. 1930. 藪の害虫オホオスグロハバチ *Dolerus harukawai* Waterston に就きて. 農学研究 15.
- Harukawa, C., (Kondō, S.). 1925—'30. Studies on the rush saw-fly, *Tomostethus juncivorus* Rohwer, I—IV. Ber. Ōhara Inst. 2—4.
- , Kumashiro, S. 1930. On the bionomics of the larger black-male saw-fly, *Dolerus harukawai* Waterston. Ber. Ōhara Inst. 4.

vi. そ の 他

- 春川忠吉. 1922. 害虫駆除剤に就きて. 農学講演集 3.
- . 1924—'26. 昆虫の生態に就いて, I—III. 農学研究 6—8.
- . 1927. 生態学的見地より見たる日本の昆虫相. 農学研究 10.
- 近藤三郎. 1928. 数種の販売殺虫剤試験報告. 農学研究 12.
- . 1929. アキアカネ *Sympetrum frequense* Selys の産卵孵化に就いて. 農学研究 13.
- 熊代三郎. 1936. モズの早贅に関する観察. 農学研究 26.
- . 1937. 倉敷地方に於ける金亀子科数種の食餌植物調査. 農学研究 28.
- . 1937. 蠅類の季節的消長と誘引に関する実験観察. 農学研究 28.
- . 1937. 越冬昆虫の人工温による発育の促進に就いて. 農学研究 28.
- . 1937. 数種趨光性昆虫に関する調査. 農学研究 28.
- Yagi, N. 1918. Preliminary Note on the life-period of the bulb mite, *Rhizoglyphus echinopus*. Ber. Ōhara Inst. 1.
- . 1922. Description of three new aberrant forms of Rhopalocera. Ber. Ōhara Inst. 2.
- . 1924. Contribution towards the knowledge of the mosaic of silk-worm (*Bombyx mori* L.). Ber. Ōhara Inst. 2.

5. 園芸果樹部業績

- 小山益太. 1918. 果樹栽培に就いて. 農学講演集 1.

小山益太, 1920. 果樹栽培短見. 農学講演集 2.

———. 1922. 果樹栽培. 農学講演集 4.

6. 農業経営部業績

吉岡金市, (三宅章). 1942—'49. 水稻の灌漑に関する研究, I—VII. 農学研究 34—38.

———, ————. 1943. 麦の不耕栽培に関する研究, I—III. 農学研究 35.

佐藤二郎. 1947. 農業の近代化と資本構成. 農学研究 37.

———. 1947. 農業高度化の一考察. 農学研究 37.

寺田由永. 1947. 農業技術停滞性の一側面. 農学研究 37.

吉岡金市. 1947. 直播稻の多年生化に就いて. 農学研究 37.

———. 1947. 水稻直播栽培の諸問題. 農学研究 37.

———, (三宅章, 横田赳夫). 1947—'49. 水稻の直播栽培に関する研究, I—VIII. 農学研究 37—38.

佐藤二郎. 1948. わが国酪農の基礎条件, I—III. 農学研究 37—38.

吉岡金市, 三宅章. 1949. 麦作の土壤水分に関する研究, I—III. 農学研究 38.

昭和36年3月20日印刷
昭和36年3月31日発行

編集人 大原奨農会 理事 西門義一

倉敷市新川町312
発行所 財団法人大原奨農会

岡山市東中山下40
印刷所 山陽印刷株式会社